

阪神・淡路大震災のストレスが  
妊産婦および胎児に及ぼした  
長期的影響に関する疫学的調査

地震と闘ったお母さんたち、お元気ですか！

2003年12月



兵庫県産科婦人科学会

# 「阪神・淡路大震災が妊産婦および胎児に及ぼした長期的影響に関する疫学的調査」

## 報告書刊行にあたり

兵庫県産科婦人科学会

会長 丸尾 猛

平成7年1月17日早朝に起こった未曾有の阪神・淡路大震災からまもなく9年目を迎えようとしています。当学会は大震災が妊産婦および胎児に及ぼした影響について調査することが、大災害から妊産婦を守る救急医療システムの構築に寄与すると考え、平成7年9月より大規模な疫学的調査を(財)日母おぎゃー献金基金のご支援のもとに実施しました。本調査は県内の行政関係者や産婦人科医師のみならず、5000人を越える妊産婦のかたがたのご協力による実に膨大なものであり、その調査結果は「阪神・淡路大震災のストレスが妊産婦および胎児に及ぼした影響に関する疫学的調査報告書」、「報告書補遺」ならびに「大震災・母と子」として刊行することができました。調査報告書は行政や全国の主要図書館に寄贈されていますが、現在では神戸大学電子図書館内の震災文庫に収集されていますので、どなたでもインターネットで閲覧でき、関係各位より高い評価をいただいております。

震災後の復旧過程においてさまざまな職種、業界から震災の影響に関する調査報告書が刊行されました。しかしその後、大震災が長期間にわたって及ぼした影響に関する調査をおこなった報告書は年々数少なくなっており、まさしく震災の記憶が風化しつつあることが懸念されます。そこで当学会では大震災が妊産婦に及ぼした長期的影響に関する疫学調査の必要性を確信し、調査の機会をうかがってまいりましたが、幸いにもこのたび日母おぎゃー献金基金より再度のご支援を得て、震災から8年目を一区切りとした長期的影響に関する調査を実施し、その結果を「阪神・淡路大震災が妊産婦および胎児に及ぼした長期的影響に関する疫学的調査報告書」として刊行することとなりました。これもひとえにご理解をたまわった日母おぎゃー献金基金と、たび重なる調査にご協力いただいた妊産婦のかたがたのおかげと心より感謝申し上げます。

この8年間のあいだにも全国各地では大災害があいついで起こっています。そのたびに弱者である妊産婦の皆さまが苦難の避難生活を送られたであろうことは想像にかたくありません。本調査報告書が大災害に遭遇した妊産婦にたいする長期的支援策の策定に役立つことを望むとともに、被災された妊産婦とご家族の皆様がどうかつつがない生活を過ごしておられますことを衷心より祈念申し上げます。

最後に、本報告書刊行にあたり多大なご尽力をいただきました兵庫県立こども病院周産期医療センター所長大橋正伸先生ならびに日本産婦人科医会兵庫県支部長小国美種先生に心からの謝意を表します。

「私たちは地震とたたかったお母さんたちのことを忘れない」

日本産婦人科医会兵庫県支部  
支部長 小国 美 種

阪神・淡路大震災から早や9年が経とうとしています。妊娠・分娩・育児という女性にとって一生の大役ともいえるべき重大な仕事をあの地震後の悲惨な被災生活の中でなしとげられました皆さまがたにはいかがお過ごしでしょうか。われわれ産婦人科医師は母性保護を天職とする集団として、このような大震災が母児に及ぼした影響について調査して後世に残すことが務めであると考え、地震後の復旧も遅々として進まない平成7年9月より阪神・淡路大震災が妊産婦および胎児に及ぼした影響について大規模な疫学調査を敢行いたしました。調査は600余名の産婦人科医師のみならず5000人を越える妊産婦の皆さまのご協力のもとに進められ、その結果を「阪神・淡路大震災のストレスが妊産婦および胎児に及ぼした影響に関する疫学的調査報告書」として発表いたしました。

この調査がいかに大がかりなものであったかについては、そののち全国各地で発生した災害に際して妊産婦を対象としたこの種の本格的な疫学調査がなかなか行われていないことからもお判りいただけるかと存じます。まさしく時、人、支援のうち、いずれが欠けてもなしえない事業でありました。ここに厳しい被災生活の中にもかかわらずご協力いただきました多くの妊産婦のかたがたに重ねて心よりお礼を申し上げますとともに、調査をご支援いただきました(財)おぎゃー献金基金と(社)兵庫県医師会に深く感謝申し上げます。

しかし、調査を終えた時、われわれはこの震災の影響は必ずや長期間にわたって被災民の心身に大きな影響を与え続けるであろうから、数年後に再度調査を行うことが不可欠であろうと確信するに至りました。その後、再調査の準備を整えて時を待っておりましたが、震災後8年目を節目として震災が母児に与えた長期的影響についての調査を再開いたしました。今般その結果を「阪神・淡路大震災が妊産婦および胎児に及ぼした長期的影響に関する疫学的調査報告書」として刊行することとなりましたが、再度の調査にもご支援をいただきました(財)おぎゃー献金基金に衷心より深謝申し上げます。

本書をわれわれ産婦人科医師が被災した妊産婦の皆さまのことを決して忘れていない証しとして遺せることを有りがたく思うとともに、「地震と闘ったお母さんたち、お元気ですか!」と呼びかけて、被災した妊産婦とそのご家族のご多幸を祈念申し上げます。

## 目 次

摘 録(調査方法など)	i	2. 3歳児健康審査	16
A. 阪神・淡路大震災の概要	i	3. 就学(小学校入学)前健康審査	16
B. 調査方法	ii	C. こどもの発育と健康状態についての 評価	17
C. 資料と施設	iii	IV. 年少児(地震年度出生児に次いで生ま れた児)の発育	18
付. 東海地震、東南海地震、南海地震 による被害予想	v	A. 周 産 期	18
I. は じ め に	1	1. 地震年('95)以後の妊娠と出産の 回数	18
地震のさい、回答者が居住していた地 区別回答率	1	2. 地震年の出産から次の出産までの 期間	18
II. 地震による家屋損壊と親の健康・就業 および家計への影響	2	3. 妊娠期間と早産の割合	19
A. 家屋の破損と住居の移転	2	4. 分娩方法	20
1. 家屋の破損	2	5. 性別出生時体重	20
2. 住居の移転	2	6. 出産した医療施設	21
B. 現住所と家族数	6	7. 妊娠や出産で困った事項	21
1. 現 住 所	6	B. こどもの発育と健康状態についての 評価	22
2. 家 族 数	6	V. 震災を回顧しての意見など	23
C. 地震による妊産婦の健康状態と就職 状況の変化	7	A. "語り部"と"悪夢"	23
1. 妊産婦の健康状態の変化	7	B. 経済的援助	24
2. 妊産婦の就職状況の変化	7	C. 被災直後の困難	25
D. 地震による配偶者の健康状態と就職 状況の変化	7	D. 非常事態に備えて	26
1. 配偶者の健康状態の変化	9	E. 妊産婦の震災体験など	30
2. 配偶者の就職状況の変化	9	1. 激地区の妊産婦	30
E. 地震による家計への影響	10	2. 強地区の妊産婦	32
III. 地震年度出生児の発育	13	3. 軽地区の妊産婦	35
A. 周 産 期	13	4. 無地区の妊産婦	39
1. 初産・経産の別	13	5. 意見分布	42
2. 妊娠期間と分娩方法	13	VI. ま と め	47
3. 性別出生時体重	14	付. アンケート用紙の内容	51
B. 法定定時健康審査と指導	15	編 集 後 記	55
1. 1歳6か月児健康審査	15		

集 計 表 と 図 の 目 次

摘 録	i	表Ⅱ-4	転居の理由	3
表0-1 気象庁が認定した震度7の地域(1995年2月7日)	i	表Ⅱ-5	地震時と現在との居住地区の関係	3
図0-1 災害救助法で指定された地域と烈震地帯	i	表Ⅱ-6	地震時と現在の住居の種類の変化	4
表0-2 阪神・淡路大震災による地域別死亡者数とX年後の人口回復率	ii	表Ⅱ-7	最終的に落ち着くまでの期間	4
表0-3 1995年度の調査における震災の地域分類	iii	表Ⅱ-1 a	神戸市(全区)の人口の推移	5
表0-4 巨大地震の発生年	v	表Ⅱ-1 b	神戸市灘区・長田区・西区の人口の推移	5
図0-2 巨大地震の想定震源域とトラフ	v	表Ⅱ-8	現住所を地域別に分類した場合の回答者数と各地域の人口	6
表0-5 巨大地震が単独または同時に発生した場合の被害想定の大略	vi	表Ⅱ-9	家族の構成人数	6
表0-6 防災対策推進地域の指定案と東南海・南海地震同時発生による被害想定	vii	表Ⅱ-10	地震による妊産婦の健康状態の変化	7
表0-7 時刻別被害想定	viii	表Ⅱ-11	地震による妊産婦の就職状況の変化	8
表0-8 建物の全壊による死者数および地震の揺れと液状化による建物全壊棟数	viii	表Ⅱ-12	妊産婦の就業が変化した原因	8
		表Ⅱ-13	地震による配偶者の健康状態の変化	9
Ⅰ. は じ め に		表Ⅱ-14	地震後の配偶者の就業状況の変化	10
表Ⅰ-1 地区別回答数	1	表Ⅱ-15	配偶者の就業が変化した原因	10
		表Ⅱ-16	地震後の暮らしむきの状況(本調査の結果)	11
Ⅱ. 地域による家屋損壊と親の健康・就業および家計への影響		表Ⅱ-16 a	地震後の暮らしむきの状況(神戸市調査結果との比較)	11
表Ⅱ-1 地震のときに妊産婦が住んでいた家屋の損壊状況	2	表Ⅱ-17	暮らしむきが悪化した原因(本調査の結果)	11
表Ⅱ-2 地震後に転居したか	3	表Ⅱ-17 a	暮らしむきが悪化した原因(神戸市調査結果との比較)	11
表Ⅱ-3 地震後に転居した回数	3		神戸市市民参画推進局によるアンケートの結果(抜粋)	12

III. 地震年度出生児の発育	13	表IV-6	予定していた施設で出産した	
表III-1	初産・経産の別	13	か	21
表III-1 a	初産の占める割合	13	表IV-7	妊娠・出産でとくに困ったこ
表III-2	地震から出産までの日数	14	と	21
表III-3	妊娠期間	14	表IV-8	児の発育・健康に対する母親
表III-4	分娩方法	14	の評価(一部再掲)	22
表III-4 a	帝王切開の実施率	14		
表III-5	出生時体重	15	V. 震災の回顧など	
表III-5 a	出生時平均体重の推移	15	表V-1	震災年に生まれたこどもに、
表III-6	1歳6か月児健康審査での指		震災のことを話したことがある	
導や注意	15	か		23
表III-7	3歳健康審査での指導や注意	16	表V-2	震災当時のことを夢に見たこ
表III-8	就学前健康審査での指導や注		とがあるか	23
意	16	表V-3	経済的援助の有無と、どこか	
表III-9	こどもの発育・健康に対する		ら受けたか	24
母親の評価	17	表V-4	経済的援助額	25
		表V-5	家屋の損壊状況別経済的援助	25
IV. 年少児の発育		表V-6	震災直前直後に困難であった	
表IV-1	妊娠回数と出産回数	18	項目の記入者数と記入率および	
表IV-2	地震の年の出産から次の出産		該当項目係数	26
までの期間	19	表V-7	非常事態に備えてしている対	
表IV-3	妊娠期間	19	策	27
表IV-3 a	早産の割合の年次推移	20	表V-8	自由記述に応じた人数と転記
表IV-4	分娩方法	20	した人数	30
表IV-5	性別出生時体重(一部再掲)	20	表V-9	記述内容の項目別一覧表
				43

1. 阪神・淡路大震災の概要

1995年1月17日 午前5時46分 発生  
 震源:淡路島東北端付近 震度:7.2~7.3  
 死亡者:6,433人 行方不明者:3人  
 負傷者:43,792人(うち、重傷:10,683人)  
 全壊:104,906棟 186,175世帯  
 半壊:144,274棟 274,181世帯  
 倒壊家屋処理対象:113,386棟  
 停電:100万世帯 断水世帯:100万世帯  
 ガス停止:85万世帯 電話不通:48万回線  
 避難所:学校・公民館などが充てられ、ピーク時  
 (1月23日)には 1,153か所に316,000人が居住。  
 仮設住宅:被災者を一時的に収容するために、

公園や校庭に建設され、4年半後に解消される  
 までに48,300戸を数えた。この仮設住宅では誰  
 にも気づかれないままに“孤独死”した者の数  
 が200人を越えた。

震動の激しかった地域では医療機関の約1/4  
 が全壊または全焼した。震災後1週間までに救  
 援のため派遣された医師の延数は3,300人を数  
 え、救護所(医師1人、看護師4人が標準)へは  
 4月末に撤収されるまでに、延75,000人の医師・  
 看護師が派遣された。

この震災で気象庁が震度7と認定した地域は  
 表0-1に示す10か所である。

表0-1 気象庁が認定した震度7の地域 (1995年2月7日)

a. 神戸市須磨区JR須磨駅付近から兵庫区 新開地まで	e. 西宮市甲東園付近
b. 中央区JR三ノ宮駅付近から西宮市阪急 夙川駅付近まで	f. 同市阪急西宮北口駅付近
c. 芦屋市三条町付近の一部	g. 同市阪神今津駅付近
d. 同市山手町の一部	h. 宝塚市JR宝塚駅東側
	i. 同市JR中山寺駅付近
	j. 北淡町、一宮町、津名町の一部

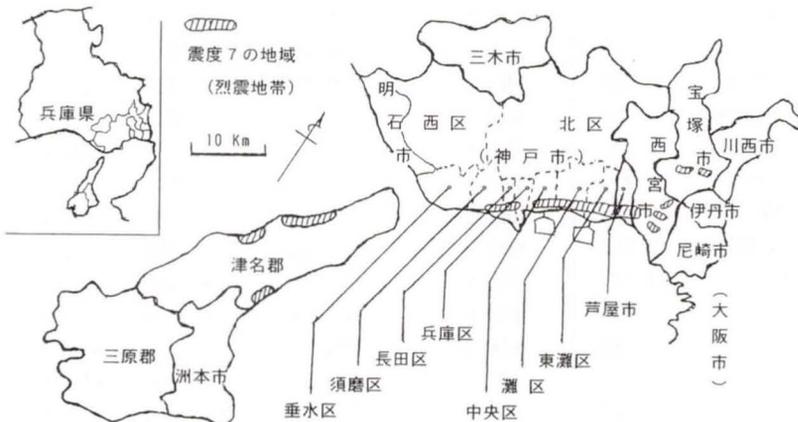


図0-1 災害救助法で指定された地域と烈震地帯

注. 津名郡は淡路・北淡・一宮(以上、北淡3町)・東浦・津名・五色の6町、三原郡は緑・三原・  
 西淡・南淡の4町からなる。

この震災に対して図0-1に示す10市10町が災害救助法の対象に指定された。これらの地域

における被災死者数および2003年1月における人口の回復率を表0-2に掲げた。

## 2. 調査方法

### a. 1995年度に実施した調査のうち妊産婦へのアンケート

1995年度の調査（以下、「前回調査」と略記）では調査対象地域のうち、人口10万に対する被災死者数が500以上の地区を「激甚被害地区」、40以上500未満を「強度被害地区」、1以上40未満を「軽度被害地区」、それ以外の兵庫県内を「無被害地区」、兵庫県以外を「その他の府県」と分類して集計し、集計結果をまとめた各表の左端に、これらを「激」、「強」、「軽」、「無」、「他」と略記し、これらの5地区を本文中では「激地区」、「強地区」、「軽地区」、「無地区」、「その他」と記した。これを具体的に示

したのが表0-3である。ただし、以上は震災による死亡者の率に基づいた便宜的分類であるから、「無被害地区」でも震災による負傷や家屋の破損などの被害を受けた例が少なくなかったことを付言しておきたい。

また、前回調査では兵庫県下の産科施設に依頼して、1995年1月17日から同4月16日までの3か月間に出生した妊産婦に宛てて、それぞれの産科施設と兵庫県産科婦人科学会の連名でアンケート用紙を発送したため、回収率は100%に近かった。なお、回答者の氏名や住所を記入するか否かは回答者の自由に任せた。

表0-2 阪神・淡路大震災による地域別死者数と8年後の人口回復率

地域	死者数	死亡率 (人口10万対)	常 住	推計人口	人口 回復率
			震 災 時	2003年 1月	
北淡3町	53	139.4	38,015	25,661	65.7
洲本市	4	9.3	43,098	40,515	94.0
三木市	1	1.3	77,508	75,629	97.6
明石市	6	2.2	278,830	292,397	104.9
神戸市 西 区	5	3.2	158,580	239,874	151.3
垂水区	7	3.0	235,254	224,956	95.6
北 区	9	4.5	198,443	224,925	113.3
須磨区	348	185.0	188,119	173,759	92.4
長田区	750	547.9	136,884	104,932	76.7
兵庫区	435	351.0	123,912	107,575	86.8
中央区	213	183.2	116,279	111,606	96.0
灘 区	858	662.2	129,578	124,935	96.4
東灘区	1,317	691.9	190,354	199,245	104.7
(神戸小計)	3,942	266.8	1,477,410	1,511,807	102.3
芦屋市	414	472.8	87,541	88,399	101.0
西宮市	1,049	246.4	425,711	452,211	106.2
宝塚市	90	44.0	204,552	217,204	106.2
尼崎市	27	5.4	497,333	463,544	93.2
伊丹市	11	5.9	186,650	191,859	102.8
川西市	1	0.7	141,743	156,486	110.4

死者数は1995.3.31, 現在: 神戸市医師会報. 414:15(1995)による。

人口は兵庫県統計課: 兵庫県の人口の動き による。

## b. 今回(2002年度、平成14年度)の調査

上記のように、前回調査では回答者の氏名や住所を記入するか否かは回答者の自由に任せたが、記入した者が多数あったので、今回の調査(以下、「本調査」と略記)では本調査の結果を前回調査のそれと適正に比較できるようにするため、震災当時に兵庫県下の妊産婦が居住していた4地区で調査対象者数の比が前回調査のそれに近似するよう配慮つつ、アンケート用紙を複数回にわたって発送した。これについては表I-1を参照していただきたい。

本調査では、兵庫県以外で被災した妊産婦、すなわち前記の「その他の府県」を調査対象から除外した。このため、前回調査報告書の諸表で地区合計欄に示した比率を本報告書に再掲する場合には、「その他の府県」の実数を除いた4地区の合計を算出し、これを100%とした比

率を記載したので、前回調査報告書の表の数値とは異なる場合もある。

各集計表で[ ]内の数値はとくにことわりのない限り表の最右欄の合計値を100とした%であり、小数点以下は4捨5入しているため数値の合計は必ずしも100にならない場合がある。データの統計学的検定は、もとの実数に基づく $\chi^2$ 検定またはt検定により行った。

なお、一般にアンケート調査では、質問の内容が同じでもその表現(言い回し)などによって回答にかなりの差が生ずる場合のあること、および回答の集計表を簡潔にするために表の見出し項目を略記した場合が少なくないという理由から、巻末に収録した調査用紙と重複することをいとわず、各表の前にそれぞれの質問文を掲げて参照しやすくした。

表0-3 1995年度の調査における震災の地域分類

	調査結果表 での略記	文中の 略記	人口10万対 死亡者数	含まれる地域
激甚被害地区	激	激地区	500~	東灘区 灘区 長田区
強度被害地区	強	強地区	40~499	中央区 兵庫区 須磨区 西宮市 芦屋市 宝塚市 津名郡
軽度被害地区	軽	軽地区	1~39	北区 垂水区 西区 明石市 尼崎市 川西市 伊丹市 三木市 洲本市 三原郡
無被害地区	無	無地区	0	上記以外の兵庫県
その他の府県	他	他府県		兵庫県以外

## 3. おもな施設と資料

### [ 施設 ]

#### 1. 阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」

神戸市中央区脇浜海岸通 078-262-5050

<http://www.dri.ne.jp/>

大規模災害に対する総合的施設

#### 2. 神戸港震災メモリアルパーク

中央区波止場町(メリケンパーク東岸)

震災で損壊沈下した突堤の一部をそのまま保存し、港湾諸施設の被災・復興状況を写真などで展示している。

### 3. 野島断層保存館

兵庫県津名郡北淡町(淡路島) 0799-82-3020  
<http://www.nojima-danso.co.jp>

阪神・淡路大震災の震源地南方に生じた垂直のズレ 60cmの断層が100m以上にわたって屋内に保存されている。

### 4. 地震断層観察館

岐阜県本巣郡根尾村(大垣市から樽見鉄道で北へ約1時間) 058138-3560

<http://www.neomura.jp/kankou/dansou2.htm>

わが国の内陸部で起きた、最大規模の濃美地震(1891年,マグニチュード 8.0)で生じた垂直のズレ 6mの断層(特別天然記念物)を間近に観察できる。2002年夏、集中豪雨による水害で冠水したが半年余で修復された。

地震資料館・地震体験館が隣接する。

#### [ 資 料 ]

#### 1. 「1.17.文庫」(震災関連資料コーナー)

神戸市立中央図書館 内

神戸市中央区楠町 078-371-3351

<http://www.city.kobe.jp/cityoffice/57/070/welcome.html>

阪神・淡路大震災に関する刊行物数千冊を収納している。2号館に「震災関連資料室」。

#### 2. 震災文庫(神戸大学人文・社会学図書館 内)

神戸市灘区六甲台町 078-803-7342

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/>

#### 3. 本学会の刊行物

上記の震災文庫にすべて収集されており、インターネット上で閲覧できる。

##### a. 「阪神・淡路大震災のストレスが妊産婦

および胎児に及ぼした影響に関する疫学的

調査報告書」 1996. 3. 1.

妊産婦に対するアンケートのみでなく、産科の医師・医療機関、その他について総合的な調査結果をまとめている。残部があるので、兵庫県立こども病院・産科(〒654-0081 神戸市須磨区高倉台1丁目)へ請求すれば、返信切手390円同封で入手できる。

##### b. aの「補遺」 1996. 6.

震災当時の1,900余人に及ぶ妊産婦が大災害について綴った体験・意見・感想などの全文を収録した。残部なし。

##### c. 「大震災・母と子」 1998. 1. 17.

b.の自由作文から約1/5を項目別に収録し、a.のデータの一部を加えて編集した。

#### 4. 今後予想される巨大地震についての資料

中央防災会議は東海地震、東南海地震、南海地震について2001~2030年に発生する確率は40~50%、マグニチュードは8以上と予測し、これらの巨大地震による被害予想を地図などを用いて地域別・発生時刻別に公表した。その概略は相次いで日刊紙に掲載されている。

たとえば、

「東海地震被害想定概略」

各新聞 2002年8月30日付 朝刊

「東南海・南海地震被害想定概略」

各新聞 2002年12月25日付 朝刊

各新聞 2003年4月18日付 朝刊

これらに関しては事の重大性を考え、その要点をできるだけ整理し次頁以降で紹介する。

東海地震、東南海地震、南海地震による被害予想

中央防災会議の専門委員会は東海地震、東南海地震、南海地震(以下、巨大地震と略称する)が単独で、あるいは同時発生した場合の被害予想を発表している。今後に予想されるこれらの巨大地震に対して、国・自治体・個人がそれぞれに対策を強化し少しでも被害の軽くなることを願って、公表されている概略を以下に転記する。

3つの地震は100~150年程度の間隔で発生し、同時発生や短期間に続発する場合が多い。1854年の南海地震は東海地震と東南海地震の同時発生から32時間後に起きた。直近の地震は東海が1854年、東南海1944年、南海1946年で、マグニチュードは8前後である。これらを表0-4に示した。

想定震源域は図0-2に示すように広いから以下の表の数値は大まかな被害想定を概数で示したものであり、建物を補強したり津波のさい早期に避難するか否かなどによって、被害程度を軽くできることを心得ておかねばならない。また、これらの数値は公表時期で多少異なる場合もある。

さて、これらの巨大地震を直視せねばならない理由として端的に3種類の数値：発生確率、マグニチュード、経済被害額を挙げておこう。巨大地震の起きる確率は南海地震の場合、今世

紀の初めから30年以内に起きる確率は40%、50年以内なら80%であり、“運が良ければ”50年以上起きない確率も20%はあるが今年中に起きる危険性も含まれている。東南海地震は30年以内が50%、50年以内が80~90%、東海地震では、こうした数値ではなく“きわめて切迫”と表現されている。次に地震のマグニチュードは東海8.1、東南海8.4、南海7.5と、阪神・淡路大震災のマグニチュード7.2~7.3を上回っており、これに対応して、被害想定額は東海の場合、37兆円(直接被害26兆円、間接11兆円)東南海と南海の同時発生では56兆円(直接被害は42兆円、間接14兆円)、東海・東南海・南海の同時発生なら81兆円で、いずれも阪神・淡路の直接被害額10兆円を大幅に超えている。阪神・淡路を上回るといえば、これら地震の巨大さがよく理解されるであろうが上記の金額はあまりに膨大なため実感しにくいから、具体的な説明を補足しておこう：1万円札の札束を前記の81兆円分積み上げ、これを新幹線の線路上に横倒したとき、その長さは博多(福岡)から名古屋までになる。

以上を念頭に置いたうえで、はじめに巨大地震が単独または同時に発生した場合に生ずる被害想定 of 具体的概略を、次に関東に影響の大きい東海地震、最後に関西へ深刻な被害を及ぼすと

表0-4 巨大地震の発生年

年	[南海]	[東南海]	[東海]
1498		●	●
1605	●	●	●
1707	●	●	●
1854	●	●	●
1944		●	
1946	●		

注. ●は震源が東海震源域の中心より西へ偏っていた場合。



図0-2 巨大地震の想定震源域とトラフ(岩盤の接するくぼみ)

懸念される東南海と南海地震の同時発生した場合を見よう。

### 1. 巨大地震が単独または同時に発生した場合の被害想定の大略

この被害想定は表0-5に概括されている。同表でとくに目立つことは、南海地震の場合、他の2地震に比べると建物崩壊の割には死者数がきわめて多く、その原因に津波が大きく関与していることであり、とくに沿海地域では地震後に高所へ直ちに避難できる対策が急がれる。津波については、東南海地震と南海地震が同時に発生した場合の項にまとめて記す。

### 2. 東海地震

ここでは表0-5に示された事項の反復を最小限にとどめ、主として同表に掲げられていない被害などについて記す。

最大震度は7(静岡県)と想定され、被害は1都9県に及ぶ。

#### 死者

死亡者数は地震の発生時刻で異なると考えられるから、住民の大部分が就眠しているために

建物倒壊による死者数が最大となる時刻として5時、多くの住民が職場や学校へ出ているため自宅にいるものが少ない時刻として12時、火災の影響が大きいと考えられる時刻として18時の3者について死者数が推計されている。また、従来の実状では土地の液状化で建物が全壊しても死者はほとんど出ないとされている。

予知のない場合 { 発生時刻が5時: 7100~8100人  
12時: 3600~4100人  
18時: 3600~4000人

予知のある場合(避難可能) 2100人以内

建物被害による死者が8100人の場合、津波・火災による死者を合わせると10,000人

(20分以内に津波が到達する地域の居住者は11,000人。1m以上の浸水に見舞われる地域の居住者は32,000人)

重傷者は 4000~15,000人

要救助者 11,000~42,000人

生活上の被害人口

停電 520万人 断水 550万人

ガス供給不能(1週間後)290万人

1週間後の避難所生活者 190万人

表0-5 巨大地震が単独または同時に発生した場合の被害想定の大略

	原因	東海	東南海	南海	東海+東南海	東南海+南海	東海+東南海+南海
死者数	建物倒壊	6700	4000	2400	9500	6600	12200
	津波	2300	2900	8700	3700	10000	12700
	火災	600	300	100	800	500	900
	斜面災害	700	700	1400	1200	2000	2600
	計	10100	7900	12600	15200	21000	28300
全壊建物千	揺れ	170	109	54	247	170	309
	液状化	26	51	30	57	83	90
	津波	10	15	45	18	57	62(5m以上)
	斜面災害	8	8	14	13	22	27
	火災	250	207	84	368	313	473
計	463	389	228	702	645	960	

注. 数字は概数で「計」は各項目の合計と必ずしも一致しない。死者数は地震が5時(就寝時刻)、全壊建物棟数は18時と最悪の場合の発生を想定。斜面災害は崖崩れなど。

### 3. 東南海地震+南海地震

標記の両巨大地震が同時に（または短期間に相次いで）発生した場合は、マグニチュードが8.6程度とされており、防災対策推進地域(指定案)を含む都府県の被害を表0-6にまとめた。この防対推進地域とは震度6以上の強い揺れか、波高3m以上の津波に見舞われる恐れがある地域で、自治体が防災計画を見直し強化する必要があり、静岡県～高知県（宮崎県の一部も）の太平洋沿岸から内陸部へ50kmほどの地域などが指定され、予測震度は6以上である。この地域沿岸部では津波の波高が3m以上（高知では10m以上）のため、同表によると三重・和歌山・

高知の各県では全死者数のうち津波による死者が大きな比重を占めていることが注目される。

表0-7には東海地震の場合と同様に、時刻別の推定死者数が示されている。この表で「水門不全」と記した「水門が閉鎖できなかった場合に増加する死者数」の多さは津波対策の重要性を訴えている。津波が陸地へ到達するまでの時間は四国南岸で30分以内（一部は10分以内）、大阪湾へは2時間前後とされている。なお、以上に概略を記した震度・津波の波高・全壊棟数などについては、地域を1km<sup>2</sup>ごとに細分化して色分けした詳細な予測地図が公表されている

表0-6 防災対策推進地域の指定案と東南海・南海地震同時発生による被害想定

都府県	数	おもな市	死者数(人)				計	全壊建物(棟)					計
			建物	津波	火災	斜面		揺れ	液状	津波	斜面	火災	
東京	2												
長野	1												
岐阜	12	大垣・羽島	60				60	1200	3500		60	1700	6460
静岡	36	静岡・浜松	1400	20	100	100	1620	35900	5300	140	1200	62500	105040
愛知	78	名古屋・豊橋	1800	200	100	200	2300	57600	27500	3000	2600	99700	190400
三重	62	津・四日市	1600	2100	70	300	4070	34600	7500	7500	2900	47200	99700
滋賀	23	彦根	30				30	600	2300		50		2950
京都	1	京都	10				10	90	1800		60		1950
大阪	35	大阪・堺	100			30	130	2600	19700	140	300	4100	26840
兵庫	22	神戸・姫路	50			40	90	1300	3900	1800	400	1400	8800
奈良	7	五条											
和歌山	48	和歌山	1200	3700	40	300	5240	25400	3100	16200	2800	32200	79700
岡山	10	岡山・倉敷											
広島	7	呉・竹原											
山口	1												
徳島	38	徳島・鳴門	300	1000		100	1400	7200	2700	3400	1400	7100	21800
香川	7	高松											
愛媛	46	松山・今治	100	20		90	210	2600	3500	500	900	1300	8800
高知	46	高知・室戸	1200	4200	70	700	6170	27700	1900	16800	7500	44700	98600
大分	7	佐伯・臼杵		20		10	30		200	800	100		1100
宮崎	8	宮崎・延岡		500		20	520	200	900	2370	200		3670
計	497		7850	11760	380	1890	21880	196990	83800	52650	20470	301900	655810

注1. 防災対策推進地域とは震度6以上の強い揺れか、波高3m以上の津波に見舞われる恐れがある地域で、自治体が防災計画を見直し強化する必要のある地域。

2. 都府県名の右に記された「数」は防災対策推進地域に含まれる市町村数。

3. 被害が最大と想定される時刻：死者数は5時、全壊棟数は18時の場合を示す。

建物の倒壊数は木造か非木造かで異なり倒壊による死者数にも影響するので、表0-8にはこれが地方別に示されている。同表によると木造では非木造に比べて建物の倒壊数は5倍ほど多く、死者数は10倍前後も多い。なお、阪神・淡路大震災では同じ木造の建物でも、耐震基準のゆるかった1970年代までの建物は基準が強化された80年代以降の建物に比べると倒壊率の高かったことが知られている。地方別に同表を見ると、東南海+南海地震とはいうものの、東海地方の被害が最も大きく、これは太平洋沿岸に人口の多い都市が並んでいるためであろう。関東・北信越・九州の各地方では地震による建物の倒壊や死亡者などの直接被害は少ない。

上記のほか想定される生活上の支障として、以下の事項が指摘されている：

被害人口

停電 地震直後 1000万人

断水 直後 1400万人 1週間後 690万人

ガス停止 1週間後でも310万人

電話支障 直後 74万人

交通 東海～四国の太平洋沿岸で道路寸断  
一定期間は使用困難

家屋 家屋の被害 190万人

避難所 1日後 380万人 1週間後 440万人  
1か月後 110万人。

仮設トイレの不足 31000

物資不足 2日目で米740トン 他食糧420万食  
水6800キロリットル

1週間後 食糧1300万食

飲料水3000キロリットル

毛布51万枚 肌着76万着

医療 対応困難な重症者 最多で36000人

表0-7 時刻別被害想定

	5時	12時	18時
死 建物倒壊	6500	2900	3900
者 津波	8600	4100	5000
・ 斜面崩壊	1900	1000	1300
人 火災	400	200	2100
計	17400	8100	12300
水門閉鎖不全	3100	1400	1900
劇甚倒壊	1300	500	800
重傷者	20900	16700	17800
要救助者	39300	21900	26200
全壊建物(千棟)	400	399	662

注1. 「水門閉鎖不全」は水門が閉鎖できなかった場合に増加する死者数。

2. 「劇甚倒壊」は震度5以下の地域で家屋倒壊がひどかった場合に増加する死者数。

3. この表は最悪条件を想定した場合。

表0-8 建物の全壊による死者数および地震の揺れと液状化による建物全壊棟数

	死者数									全壊棟数(千棟)		
	5時			12時			18時			木造	非木造	計
	木造	非木造	計	木造	非木造	計	木造	非木造	計			
関東												
北信越												
東海	4400	200	4500	1800	300	2100	2600	200	2900	138	29	167
近畿	1200		1200	400		500	600		700	52	10	61
中国・四国	1600		1700	600	100	700	800	100	900	41	7	48
九州										1		1
計	7200	200	7400	2800	400	3200	4100	300	4400	232	45	277

注1. 少数の場合は空欄としてあり、このため個々の数値の合計は「計」欄の数値と必ずしも一致しない。

2. 建物全壊棟数は被害が最大の場合の数値を示す。

# I. はじめに

本調査の目的および意義は、この報告書の冒頭で代表者が述べているとおりである。

## 地震のさいに回答者が居住していた地区別回答率

本調査は地震から8年も経過した後の追跡調査であるから、前回調査に回答した妊産婦のうち、とくに激・強地区での被災者はその後に郵便局へ仮住所(本調査時点での現住所とは異なる)を届け出ていた場合も少なくないと推測されるため、本調査のアンケート用紙が前回調査の妊産婦の手元へどの程度に届くか危惧された。

アンケートを配布した結果は表I-1に示すように、全体のほぼ半数に当たる47%が転居先不明で返送され、この返送率は震災による被害の大きい地区ほど高く、強・軽地区の間、軽・無地区の間にはいずれも有意差( $p < 0.01$ )を認めた。一方、アンケート用紙を受け取ったと思われる(返送されない)もののうち、アンケートに応じた率(同表では回答率と記す)は全体の半数に近い46%に及び、この率は激地区で他の3

地区のいずれと比べても高率であった( $p < 0.05$  または  $0.01$ )。地震後の長い年月や、約半数のアンケート用紙が宛て先不明で届かなかった実情を考慮すると、用紙を受け取った人の半数近くが回答したことはこの種のアンケートとしてはきわめて高い回答率であったと考えられ、再度の調査にご協力いただいた妊産婦の皆様に対し、あらためて感謝を申しあげる。

回答者が地震のさいに居住していた地区は、調査方法で述べたように、前回調査とほぼ一致して、激地区には6.5%、強地区に約18%、合わせて全体の1/4近くが住んでいたことになり、軽地区と無地区に居住していたものはそれぞれ全体の1/3強を占めている。この地区比は兵庫県下の出生数の比にもよく近似しているから、調査標本としても妥当なものと考えられる。

問1. 震災の時どちらにお住まいでしたか。

( )市( )区 または ( )郡( )町

表I-1 地区別回答数

	前回調査	本 調 査				県下出生数[%]		
	回答数[%]	発送数	宛先不明数	返送率,%	推定受取数	回答数[%]	回答率,%	
激	322[ 6.5]	97	57	59	40	26[ 6.7]	65	3069[ 5.9]
強	886[ 17.9]	358	209	58	149	70[ 17.9]	47	9734[ 18.7]
軽	1804[ 36.3]	616	293	48	323	141[ 36.1]	44	19894[ 38.3]
無	1953[ 39.3]	537	192	36	345	153[ 39.2]	44	19250[ 37.1]
計	4965[100.0]	1608	751	47	857	390[100.0]	46	51947[100.0]

注1. 表の左端に記された「激」、「強」、「軽」、「無」は回答した妊産婦が地震のさいに居住していた地区の略号で、それぞれ「激甚被害地区」、「強度被害地区」、「軽度被害地区」、「無被害地区」を示す。以下の表でも同じ。

2. 県下出生数は兵庫県保健部「保健統計年報」(1995)による。

## Ⅱ. 地震による家屋損壊と親の健康、就業 および家計への影響

### A. 家屋の損壊と住居の移転

#### 1. 家屋の損壊

表Ⅱ-1によると、前回調査（表の'95）と本調査（同・'02）では、いずれの地区においても家屋の損壊比に有意差を認めないから、本調査の標本は前回調査との比較に適正と考えられる。

同表の結果では、激地区で被災した回答者の1割程度が家屋の全焼・全壊に見舞われ、半壊・半焼を加えると4割前後に及び、家屋の被害を免れたものは1割余に過ぎない。強地区でも全壊または半壊が1/4を占め、軽地区でも2/3ほどの回答者が家屋の被害を蒙っている。「全壊

+半壊」と「一部損壊+被害なし」でまとめると、例数の多い'95のデータでは激、強、軽、無地区の被害には相互に大きな有意差( $p < 0.01$ )があり、例数の少ない'02のデータでも強、軽、無地区の被害には相互に有意差( $p < 0.01$ )を認める。すでに述べたとおり、本調査では便宜的に無地区と分類した地域でも1割余に家屋の一部破損を生じているうえ、例外的少数ながら全壊・半壊した家屋もあるなど、震災が広範囲に及んだことを物語っている。

問2. ご自宅の被害はどのようでしたか。

1 全壊(全焼) 2 半壊(半焼) 3 一部損壊 4 被害なし

表Ⅱ-1 地震のときに妊産婦が住んでいた家屋の損壊状況

年度	全壊・全焼		半壊・半焼		一部破損		被害なし		計	
	'95	'02	'95	'02	'95	'02	'95	'02	'95	'02
激	64 [20]	2 [8]	81 [25]	6 [24]	134 [42]	12 [48]	43 [13]	5 [20]	322 [100]	25 [100]
強	68 [8]	6 [8]	149 [17]	13 [18]	412 [47]	39 [56]	252 [29]	12 [17]	881 [100]	70 [100]
軽	31 [2]	2 [1]	136 [8]	9 [7]	893 [50]	61 [61]	739 [41]	42 [31]	1799 [100]	135 [100]
無	2 [0]	0 [0]	2 [0]	0 [0]	247 [13]	28 [18]	1693 [87]	125 [82]	1944 [100]	153 [100]
計	165 [3]	10 [3]	368 [7]	28 [7]	1686 [34]	161 [42]	2727 [55]	184 [48]	4946 [100]	383 [100]

#### 2. 住居の移転

住まいを破壊された妊産婦が直面した厳しい住居事情は以下の表に示されている。

表Ⅱ-2によると地震後の転居は被災の大きかった地区ほど多く、激地区では回答者の3人に2人が転居しており、表Ⅱ-3に示す転居回数でも地区間の差は明らかで、激地区では転居者の8割が2回以上の転居をしており、3回以

上の転居も激・強地区では3割を超えている。転居理由を示した表Ⅱ-4でも、震災のためという答は激、強、弱、無地区でそれぞれ58、28、9、0%、震災以外のためは8、56、67、100%と被災の程度に併行して地区差は歴然としている。軽地区でさえ転居した1/3の人たちのうちで多少とも震災の影響による転居は1/3ある(表Ⅱ-4)。

震災により移転を強いられた妊産婦の移転先は表Ⅱ-5によると、地震時の居住地区と現住地区が同じである率は 激、強、弱、無地区でそれぞれ77、89、93、97%であり、被害の大きかった地区ほど地震後に他の地区へ移転したまま旧地区へは戻っていない傾向がうかがわれる。住居の

種類を自宅と賃貸住宅に分け、地震の前後におけるその変化を示した表Ⅱ-6では各地区間に特記すべき差はなかった。具体的転居先としては、どの地区でも親戚・知人の家が最も多いが、激・強地区では避難所での生活を体験したのも少なくなかった。激地区でも旧自宅へ戻った

問15. 地震後に、住居を変えられたことがありますか。

1  はい：転居された経過を右下の例にならって下表に記入してください。地震以外の理由で転居した場合は、住居の前に△をつけてください。記入欄の足りない場合は、一番下の余白に書き足してください。

2  いいえ

	時 期	住 居
1	地震前まで	
2	平成 年 月から	
3	平成 年 月から	
4	平成 年 月から	
5	平成 年 月から	

例	時 期	住 居
1	地震前まで	自宅(一戸建)
2	平成7年1月から	避難所
3	平成8年4月から	仮設住宅
4	平成10年1月から	賃貸アパート
5	平成11年5月から	△親戚の家(現在)

表Ⅱ-2 地震後に転居したか

	は い	いいえ	計
激	16 [67]	8 [33]	24 [100]
強	30 [45]	36 [55]	66 [100]
軽	43 [34]	84 [66]	127 [100]
無	27 [19]	117 [81]	144 [100]
計	116 [32]	245 [68]	361 [100]

表Ⅱ-3 地震後に転居した回数

	回 数				計
	1	2	3	4	
激	3 [19]	8 [50]	5 [31]	0 [0]	16 [100]
強	13 [48]	5 [19]	8 [30]	1 [4]	27 [100]
軽	25 [61]	12 [29]	4 [10]	0 [0]	41 [100]
無	18 [69]	6 [23]	2 [8]	0 [0]	26 [100]
計	59 [54]	31 [28]	19 [17]	1 [1]	110 [100]

表Ⅱ-4 転居の理由

	震 災	震災とそれ以外	震災以外	計
激	7 [58]	4 [33]	1 [8]	12 [100]
強	7 [28]	4 [16]	14 [56]	25 [100]
軽	4 [9]	10 [23]	29 [67]	43 [100]
無	0 [0]	0 [0]	27 [100]	27 [100]
計	18 [17]	18 [17]	71 [66]	107 [100]

表Ⅱ-5 地震時と現在との居住地区の関係

	現 在 の 居 住 地 区					計
	激	強	弱	無	他府県	
地 震 時 の 住 居 地 区 計	20 [77]	1 [4]	4 [15]	1 [4]	0 [0]	26 [100]
激	3 [4]	62 [89]	1 [1]	2 [3]	2 [3]	70 [100]
強	0 [0]	3 [2]	131 [93]	5 [4]	2 [1]	141 [100]
軽	0 [0]	0 [0]	3 [2]	149 [97]	1 [1]	153 [100]
無	23 [0]	66 [17]	139 [36]	157 [40]	5 [1]	390 [100]

り、新たに自宅を新築した人が9割に近いが、親戚・知人宅に残ったままのものも各地区にみられる。

妊産婦が現在地に落ち着くまでの期間を表Ⅱ-7に示した。これは地震の起きた日から問15に回答する「住居」欄の最下段に記入された現住地に移転した日までの期間を算出したもので、記入のなかったものについては地震から回答日まで住居の移転はなかったものとして、この期間は0とした。被害の大きかった地区ほど表Ⅱ-2～4に示したとおり地震による転居を強い

られているから、被災の強い地区に住んでいたものは被災程度の軽かった無地区に比べてこの期間は長いであろうと推測される。実際に、表Ⅱ-7によると、無地区の平均281日より軽地区の344日は長く、強地区の426日はさらに長い。しかし激地区では274日で無地区より短かった。以上は各地区の平均値を単純に比較した結果であり、統計学上の有意差はないが、上記の期間の平均値が激地区で見かけ上短いのは、アンケート用紙が転居先不明のため返送された率の高かったことと関係しているのかもしれない。

表Ⅱ-6 地震時と現在の住居の種類の変化

	自→自	自→賃	賃→自	賃→賃	計
激	5 [33]	0 [0]	8 [53]	2 [13]	15 [100]
強	10 [37]	2 [7]	12 [44]	3 [11]	27 [100]
軽	15 [41]	4 [11]	15 [41]	3 [8]	37 [100]
無	11 [44]	4 [16]	8 [32]	2 [8]	25 [100]
計	41 [39]	10 [10]	43 [41]	10 [10]	104 [100]

注. 自は自宅および実家、賃は賃貸住宅を示す。

表Ⅱ-7 現住地に落ち着くまでの期間(日)

激	274 ± 487 (26)
強	426 ± 852 (70)
軽	344 ± 759 (141)
無	281 ± 735 (153)
計	329 ± 752 (390)

注. 平均±標準偏差(例数)で示す。

神戸市全体または区単位の人口変動から震災を見ると、表Ⅱ-1 aに示すように、漸増傾向にあった神戸市の人口は地震の起きた1995年に10万人近く減少し、これは例年より神戸市内への転入者が減少した以上に市外への転出者が著増したためで、この中には被災した結果、市外への転出を余儀なくされたものが多数含まれていることはいうまでもない。地震後8年余りの歳月を経て7～8割程度に復興したといわれる神戸市は、同表から見ると人口の面では震災後

10年で地震前の水準にほぼ復帰しそうである。

地震以前から市の中心部(激・強地区)は人口が横ばいまたは減少の傾向を示していたのに対して、周辺部(北・垂水・西区=軽地区)では人口が漸増していた。このことは前者の中から灘・長田の両区、後者から西区を例示した表Ⅱ-1 bで明らかであるが、中心部がとくに壊滅的な打撃を受けた神戸市では、中心部から周辺への人口移動が被災者の移住に伴って著しく加速された様子が同表からうかがわれる。

表Ⅱ－1 a 神戸市(全区)の人口の推移

	人 口	転 入		転 出	
		市外から		市外へ	
1991	1,488,619	102,901	64,130	95,410	56,649
92	1,499,195	100,801	63,991	93,515	56,586
93	1,509,395	103,364	63,498	96,490	56,768
94	1,518,982	108,586	65,778	102,503	59,729
95	1,423,792	111,332	53,551	155,685	97,787
96	1,434,572	109,014	60,294	112,821	64,625
97	1,454,632	112,757	63,313	108,900	59,487
98	1,475,342	112,261	61,527	108,782	58,059
99	1,483,655	104,957	59,655	99,197	53,948
2000	1,493,398	100,251	60,005	93,644	53,515
01	1,503,384	95,641	59,607	87,893	51,911
02	1,510,468	89,755	56,238	85,435	51,039

注1. 神戸市企画調整局「統計こうべ」による。市外転出入は内数。

2. 人口は10月1日現在で、2003年3月の人口は1,511,335人。

表Ⅱ－1 b 神戸市灘区・長田区・西区の人口の推移

年/月	灘 区		長 田 区		西 区	
	人 口	対前月増減	人 口	対前月増減	人 口	対前月増減
1991/ 1	129,431	25	136,617	△ 119	160,903	381
1992/ 1	127,999	△ 180	135,066	△ 185	171,607	541
1993/ 1	126,927	△ 123	133,411	△ 176	180,927	612
1994/ 1	125,975	33	132,084	△ 48	191,437	365
1995/ 1	124,538	△ 60	129,978	△ 163	201,530	639
2	123,212	△ 1,326	128,641	△ 1,337	201,663	133
3	120,742	△ 2,470	126,405	△ 2,236	202,400	737
4	117,913	△ 2,829	123,786	△ 2,619	203,963	1,568
5	116,674	△ 1,239	122,180	△ 1,606	206,299	2,331
6	115,687	△ 987	120,595	△ 1,585	207,625	1,326
7	114,886	△ 801	119,523	△ 1,072	208,627	1,002
9	113,687	△ 619	117,828	△ 831	210,247	998
11	97,097	△ 391	96,216	△ 591	222,780	617
1996/ 1	96,459	△ 220	95,108	△ 529	224,170	758
1997/ 1	95,730	△ 101	91,056	△ 203	232,381	662
1998/ 1	97,549	14	88,172	△ 90	239,297	256
1999/ 1	113,843	96	108,057	△ 118	236,520	233
2000/ 1	115,419	12	107,380	△ 2	239,704	167
2001/ 1	121,384	376	105,249	△ 61	236,227	127
2002/ 1	123,384	98	105,029	△ 44	238,095	64
2003/ 1	124,935	272	104,932	4	239,875	86

注. 神戸市企画調整局「統計こうべ」による。△は減少を示す。

## B. 現住所と家族数

### 1. 現住所

兵庫県を表Ⅱ－8に示すような7つの地域に分割した場合、人口の地域比は前回調査と8年後の本調査で変化は見られない。回答者の比率

は阪神間がやや減少し、その分だけ見かけ上は神戸市内からの回答が増えた結果となっている。

問14. 現在、どちらにお住まいですか。

( )市( )区 または ( )郡( )町

表Ⅱ－8 現住所を地域別に分類した場合の回答者数( [ ]内は% )と各地域の人口

地域	前回調査		本調査		該当する市と郡
	回答数	人口	回答数	人口	
神戸市	1346[ 27]	1,484,248[ 27]	114[ 29]	1,505,628[ 27]	神戸市
阪神間	1296[ 26]	1,635,737[ 30]	90[ 23]	1,702,006[ 31]	尼崎・西宮・芦屋・川西・宝塚・伊丹・三田市 川辺郡
東播磨	984[ 20]	997,640[ 18]	83[ 21]	1,018,537[ 18]	明石・三木・加古川・高砂・小野・加西・西脇市 美囊・加東・多可・加古郡
西播磨	831[ 17]	865,195[ 16]	65[ 16]	870,180[ 16]	姫路・龍野・相生・赤穂市 飾磨・神崎・揖保・赤穂・佐用・宍粟郡
但馬	199[ 4]	205,480[ 4]	11[ 3]	199,662[ 4]	豊岡市 城崎・出石・美方・養父・朝来郡
丹波	140[ 3]	118,723[ 2]	11[ 3]	118,990[ 2]	多紀・水上郡
淡路	169[ 3]	162,842[ 3]	16[ 4]	157,910[ 3]	洲本市 津名・三原郡
兵庫・計	4965[100]	5,469,865[100]	390[100]	5,572,913[100]	
他府県	272				
合計	5237				

注. 本調査の人口は、2002年1月1日現在(兵庫県による推計値)。

### 2. 家族数

家族数は表Ⅱ－9に示すように4～5人で、地区間には有意差がない。これは2003年3月末の全国集計による1世帯平均家族数2.59人よりはるかに多い数値である。この差は、本調査の対象者のほとんどが夫婦と子どもから構成されているのに対して、全国集計には独身者や夫婦のみの世帯が多く含まれているためである。

問16. ご家族はあなたを含めて全部で何人ですか。( )人

表Ⅱ－9 家族の構成人数

激	4.3 ± 0.8 (24)
強	5.0 ± 6.1 (46)
軽	4.6 ± 1.1 (132)
無	5.2 ± 1.2 (146)
計	4.8 ± 1.2 (376)

注. 家族構成人数の

平均±標準偏差(家族数)で示す。

## C. 地震による妊産婦の健康状態と就職状況の変化

### 1. 妊産婦の健康状態の変化

地震前と比べて、自己の健康の面で何かとく  
に変わったと思われることの有無を尋ねた結果  
は「あり」と答えたものが1割を占めたが、地  
区間には有意差を認めなかった(表Ⅱ-10)。

「あり」という答の中には「パニック障害」  
と記したものが4人、具体的には「乗物などの  
閉鎖空間で気分が悪くなる」などがあり、「う  
つ状態になった」、「神経質になった」、「い  
らいらすようになった」など精神面で不安定  
になったという訴えが目立ち、震災に関連して、  
「時々、地震で揺れているんじゃないかと疑う

時がある」、「ちょっとした音に大きく敏感に  
なりました」、「少しの揺れ、たとえば歩道橋  
を渡っている時などにも足がすくんだりする」、  
「小さな揺れでも心臓がバクバクする」、「地震  
に関することを見聞きすると体が硬直したり、  
涙ぐんでしまう」、「時々わけもなくふさぎこ  
んだり、泣いたりする」などと記されている。  
これら以外では、更年期障害やいわゆる生活習  
慣病のほか、アレルギー性疾患・婦人科系の疾  
患なども記されている。

問17. 地震前と比べて、あなたの健康の面で何かとく  
に変わったと  
思われることが  
あります  
か。

- 1  はい：その内容( )  
2  いいえ

表Ⅱ-10 地震による妊産婦の健康状態の変化

	あり	なし	計
激	3 [12]	23 [88]	26 [100]
強	8 [12]	60 [88]	68 [100]
軽	15 [11]	121 [89]	136 [100]
無	14 [9]	137 [91]	151 [100]
計	40 [10]	341 [90]	381 [100]

### 2. 妊産婦の就職状況の変化

妊産婦の就職状況をまとめた表Ⅱ-11でまず  
目立つのは、「非就職」の全体に占める割合が  
両年度で著しく異なることである。この原因は  
質問の表現を両年度で揃えなかったという調査  
上のミスによるもので、前回調査では「地震の  
あと、あなたのお仕事はいかがですか」という  
書き出しに続いて第1選択肢は「就職していな  
かった」と地震前の状況に限定しているが、本

調査での第1選択肢は下記のように「地震前か  
ら就職していない」と地震後も一貫して非就職  
のもののみが該当するような表現になっている。  
このため、本調査では「その他」の欄内に「新  
たに就職」の欄を設け、前者の内数として該当  
者の人数を記した。したがって、本調査の「非  
就職」に(新たに就職)の人数を加えると、前回  
調査の人数に近くなるが、それでも強、弱、無

地区では前回調査の「非就職」より有意に低い割合となっている。

就職状況の変化した「現在失業中」は両年度間に有意差なく、「現在休業中」は前回調査より有意に減り(p<0.05)、「転職した」は増加しており(p<<0.01)、就職状況が変化したものは回答者全体の中では少数派であるが、これらの変化は前回調査からの年月の経過を感じさせる。転職など就職関係に変化のあったものは激、強、弱、無地区でそれぞれ32、41、30、34%、平均33%で地区間に有意差はなかった。

就職関係が変化した原因を尋ねた問19には回

答例を付したものの(巻末の「アンケート用紙」参照)、回答にやや困難を感じられたためか、同じ形式の問22、24と同様に他の質問に比べると回答率がかなり低かった。表Ⅱ-12に示すように、変化の原因は家庭の事情が29%、出産・育児が27%、その他が20%、不況が18%であるのに対して、地震は6%に過ぎない。地区別に見ると各項目の平均値にはかなりの差があるように見えるが、標準偏差が大きく例数が多くないため地区間有意差はなく、激、強、軽の3地区合計と無地区を比較しても有意差は認められない。

問18. 地震前と比べてあなたの就職状況(パートタイムを含む)に変化がありましたか。

- 1 地震前から就職していない 2 地震後も就職状況は変わらない 3 転職した  
4 現在休業中 5 現在失業中 6 その他:( )

表Ⅱ-11 地震による妊産婦の就職状況の変化

	非就職		不変		転職		休業		失業		その他		計		
	'95	'02	'95	'02	'95	'02	'95	'02	'95	'02	'95	'02(新たに就職)	'95	'02	
激	218	13	32	4	0	0	17	0	9	0	27	8	6	303	25
	[72]	[52]	[11]	[16]	[0]	[0]	[6]	[0]	[3]	[0]	[9]	[32]	[24]	[100]	[100]
強	616	31	108	9	2	3	26	0	10	0	44	25	15	806	68
	[76]	[46]	[13]	[13]	[0]	[4]	[3]	[0]	[1]	[0]	[5]	[37]	[22]	[100]	[100]
軽	1326	73	189	21	1	5	36	2	13	4	91	29	20	1656	134
	[80]	[54]	[11]	[16]	[0]	[4]	[2]	[1]	[1]	[3]	[5]	[22]	[15]	[100]	[100]
無	1331	65	332	36	1	5	42	1	14	1	89	45	32	1809	153
	[74]	[42]	[18]	[24]	[0]	[3]	[2]	[1]	[1]	[1]	[5]	[29]	[21]	[100]	[100]
計	3491	182	661	70	4	13	121	3	46	5	251	107	73	4574	380
	[76]	[48]	[14]	[18]	[0]	[3]	[3]	[1]	[1]	[1]	[5]	[28]	[19]	[100]	[100]

問19. ご自身の就業状況に変化のあった方にお尋ねします。変化した原因を右の5つに分けたらどんな割合になりますか。合計が10割になるように「記入された( )内の数字を足したら10になるように」お答えください。

- 1 地震の影響である ( ) 割  
2 不況の影響である ( ) 割  
3 家庭の事情である ( ) 割  
4 出産・育児のため ( ) 割  
5 その他の原因 ( ) 割  
合 計 10 割

表Ⅱ-12 妊産婦の就業が変化した場合

	地震	不況	家庭	出産・育児	その他	計	回答数
激	0.4±1.0	2.6±4.0	3.5±4.3	2.1±3.0	1.4±2.3	10.0	13
強	1.1±2.6	0.9±2.2	2.5±3.5	3.9±4.0	1.6±3.4	10.0	23
軽	0.3±1.0	2.4±2.7	3.3±3.5	2.4±3.3	1.6±3.0	10.0	31
無	0.2±0.9	1.6±2.9	2.5±2.9	3.1±3.9	2.6±3.6	10.0	50
計	0.6±1.8	1.8±2.7	2.9±3.3	2.7±3.6	2.0±3.4	10.0	117

注. 平均±標準偏差で示す。

## D. 地震による配偶者の健康状態と就職状況の変化

### 1. 配偶者の健康状態の変化

地震前と比べて、配偶者の健康の面でとくに何か変わったと思われることがあると答えたものは、表Ⅱ-13に示すように全地区で31人あり、回答者の1割に満たなかったが、強地区では13%で無地区より有意に多かった( $p < 0.05$ )。

健康上の変化としては、「神経質になった」や「自律神経失調症を発症」もあるが、妊産婦の場合とは異なって、この種の精神面での不調は少数派であり、アレルギー性疾患・慢性疲労・肝臓病・腰痛などが比較的多く訴えられている。

問20. 地震前と比べて、ご主人の健康の面で何かとくに変わったと思われることがありますか。

- 1  はい：その内容( )  
 2  いいえ

表Ⅱ-13 地震による配偶者の健康状態の変化

	あり	なし	計
激	2 [ 8]	24 [92]	26 [100]
強	9 [13]	59 [87]	68 [100]
軽	13 [10]	116 [90]	129 [100]
無	7 [ 5]	146 [95]	153 [100]
計	31 [ 8]	345 [92]	376 [100]

### 2. 配偶者の就職状況の変化

妊産婦を対象とした就職状況の調査と同様に配偶者についても、前回調査では設けなかった「退職」と「新たな就職」という選択肢を本調査では設け、これを「その他」の内数として表Ⅱ-14に示した。この2つの選択肢に前回調査と本調査における「転職」の差を加えた回答数が両年度の「不変」の差にはほぼ近い数値となっている。

就職先の変更は不本意な場合が多いであろうが、不景気の昨今では就職できているだけでも好ましいと一応は考えることとし、これに「新たに就職」したものを加えた数と、他方、「休業」と「失業」を加えた数を地区ごとに算出すると、激地区では前者の「就業」と後者の「失

職」がいずれも2、強・弱・無の3地区合計では「就業」と「失職」はそれぞれ45と4で、激地区では「就業」が有意に少ない( $p < 0.01$ )。激地区の成人男子は地震による大きな被害に加えて、就職面でも他の地区よりも不利な追い打ちを受けているということであろうか。

なお、「その他」に記入された理由は「給料が下がった」、「会社が倒産」、「リストラにあった」、「独立した」などであった。

配偶者の就職状況が変わった原因は表Ⅱ-15に示すように、妊産婦自身の場合よりも回答率は一層低くなっており、妊産婦の就職が変化した理由では「家庭の事情」と「出産・育児」の合計で5割を超え、「不況」が3位であったの

に対し、配偶者では1位が「不況」でほぼ半数を占め、2位の「その他」と3位の「地震」がほぼ2割、「家庭の事情」が1割となっている。

妊産婦自身の場合と同様、地区間には有意差を認めない。

問21. 地震前と比べてご主人の就職状況(パートタイムを含む)に変化がありましたか。

- 1 地震後も就職状況は変わらない 2 震災後に転職した 3 現在休業中  
4 現在失業中 5 震災後に退職した 6 震災後新たに就職した  
7 その他:( )

表Ⅱ-14 地震後の配偶者の就職状況の変化

	不変		転職		休業		失業		その他 (退職 新たに就職)		計			
	'95	'02	'95	'02	'95	'02	'95	'02	'95	'02	'95	'02		
激	272	20	18	2	3	0	6	2	22	0	0	0	321	24
	[85]	[83]	[6]	[8]	[1]	[0]	[2]	[8]	[7]	[0]	[0]	[0]	[100]	[100]
強	756	48	39	12	10	0	8	1	61	7	0	3	874	68
	[86]	[71]	[4]	[18]	[1]	[0]	[1]	[1]	[7]	[10]	[0]	[4]	[100]	[100]
軽	1567	105	59	13	9	0	15	1	146	18	6	3	1796	137
	[87]	[77]	[3]	[9]	[1]	[0]	[1]	[1]	[8]	[13]	[4]	[2]	[100]	[100]
無	1807	127	22	9	2	1	3	1	86	13	1	5	1920	151
	[94]	[84]	[1]	[6]	[0]	[1]	[0]	[1]	[4]	[9]	[1]	[3]	[100]	[100]
計	4402	300	138	36	24	1	32	5	315	38	7	11	4911	380
	[90]	[79]	[3]	[9]	[0]	[0]	[1]	[1]	[6]	[10]	[2]	[3]	[100]	[100]

注。( )内の退職などは「その他」の内数。

問22. ご主人の就業状況に変化のあった方にお尋ねします。変化した原因を右の4つに分けたらどんな割合になりますか。合計が10割になるように〔記入された( )内の数字を足したら10になるように〕お答えください。

1 震災の影響である	( ) 割
2 不況の影響である	( ) 割
3 家庭の事情である	( ) 割
4 その他の原因	( ) 割
合計	10 割

表Ⅱ-15 配偶者の就業が変化した場合

	地震	不況	家庭	その他	計(人数)
激	1.5±2.3	6.3±4.3	0.0±0.0	2.2±4.0	10.0 (6)
強	3.2±3.9	4.6±3.9	0.8±2.8	1.4±2.9	10.0 (13)
軽	1.1±1.7	4.6±3.9	1.2±2.7	3.1±4.3	10.0 (21)
無	2.2±3.2	4.8±3.8	1.2±2.6	1.8±3.2	10.0 (35)
計	2.0±3.0	4.9±3.9	1.0±2.6	2.1±3.5	10.0 (75)

注. 平均±標準偏差(人数)で示す。

### E. 地震による家計への影響

地震の前と現在とで、仕事や住居・経済状態などの暮らしむきを総合的に比べた場合、どのように変わったかを尋ねた結果は表Ⅱ-16に示すように、本調査では全地区合計で「非常に苦しくなった」、「かなり苦しくなった」、「少し苦しくなった」がいずれも前回調査と比べて

それぞれ3、8、9%増え、全般的に悪化の傾向が認められる。悪化の原因と考えられているのは表Ⅱ-17によると、不況58%、家庭の事情21%、地震13%、その他8%の順で、妊産婦およびその配偶者の就職状況の場合と同様に、地震よりも不況の影響が強く感じられている。

神戸市が2003年に行った調査(以下、「神戸市調査」と略記。12頁参照)と比べると、本調査の無地区は神戸市外なので、激・強・軽の3地区を合計し、回答の選択肢「非常に苦しくなった」～「少し苦しくなった」を神戸市調査における「生

活の低下」に相当するとして結果を表Ⅱ-16 aに掲げ、さらに生活水準が低下した原因を表Ⅱ-17 aに示した。両調査では調査方法などにやや相違する点はあるものの、大筋では両者の数値は近似していると見てよいであろう。

問23. お宅の暮らしむきを、地震の前と現在とで、お仕事や住居・経済状態など総合的に比べた場合いかかでしょうか。

- 1□非常に苦しくなった 2□かなり苦しくなった 3□少し苦しくなった  
4□ほとんど変わらない 5□以前前よりゆとりができた

表Ⅱ-16 地震後の暮らしむきの状況

	非常に苦		かなり苦		少し苦		不変		ゆとり		計	
	'95	'02	'95	'02	'95	'02	'95	'02	'95	'02	'95	'02
激	19	1	24	1	93	7	180	15	5	0	321	24
	[6]	[4]	[7]	[4]	[29]	[29]	[56]	[63]	[2]	[0]	[100]	[100]
強	31	3	50	11	211	15	568	37	9	3	869	69
	[4]	[4]	[6]	[16]	[24]	[22]	[65]	[54]	[1]	[4]	[100]	[100]
軽	60	11	86	22	327	33	1304	63	13	4	1790	133
	[3]	[8]	[5]	[17]	[18]	[25]	[73]	[47]	[1]	[3]	[100]	[100]
無	11	5	27	12	101	34	1755	96	6	4	1900	151
	[1]	[3]	[1]	[8]	[5]	[23]	[92]	[64]	[0]	[3]	[100]	[100]
計	121	20	187	46	732	89	3807	211	33	11	4880	377
	[2]	[5]	[4]	[12]	[15]	[24]	[79]	[56]	[1]	[3]	[100]	[100]

表Ⅱ-16 a 地震後の暮らしむきの状況

	非常～少し苦(低下)	不変(おち変わらぬ)	ゆとり(向上)	わからない	計
本調査:激+強+軽	104[46]	115[51]	7[3]		226[100]
神戸市調査:市民	[48]	[39]	[7]	[6]	[100]

問24. 地震前より悪くなったとお答えになった方にお尋ねします。悪くなった原因を、右の4つに分けたらどんな割合になりますか。合計が10割になるように〔記入された( )内の数字を足したら10になるように〕お答えください。

1 地震の影響である	( ) 割
2 不況の影響である	( ) 割
3 家庭の事情である	( ) 割
4 その他の原因	( ) 割
合計	10 割

表Ⅱ-17 暮らしむきが悪化した原因

	地震	不況	家庭	その他	計
激	0.7±1.3	4.7±3.7	4.3±4.0	0.3±0.9	10.0 (11)
強	1.3±2.4	5.8±3.1	1.8±2.4	1.1±1.0	10.0 (24)
軽	1.1±1.6	6.0±3.2	2.4±3.2	0.5±1.1	10.0 (37)
無	1.5±2.4	5.9±3.4	1.7±2.5	0.9±1.8	10.0 (69)
計	1.3±2.2	5.8±3.3	2.1±2.9	0.8±1.6	10.0(141)

注. 平均±標準偏差(人数)で示す。

表Ⅱ-17 a 暮らしむきが悪化した原因

	不況	震災	個人的理由(など)	計
本調査:激+強+軽 '02	[57]	[11]	[32]	[100]
神戸市調査:市民 '99	[27]	[73]		[100]
'03	[58]	[15]	[27]	[100]

## 神戸市市民参画推進局によるアンケートの結果（抜粋）

2003年6月4～17日実施 20歳以上の神戸市民(外国人を含む)1万人を無作為抽出してアンケート用紙を郵送。期限までに回答しなかったものには督促状。回答率 51%。回答の数字はすべて%である。  
1999年に実施されたアンケートで同じ設問に対する回答結果を99年の欄に併記した。

	99年	03年
<b>A. 世帯の生活は1年前と比べて</b>		
向上している	3.9%	3.0%
あまり変わらない	55.7	52.9
低下している	38.9	43.1
わからない	1.5	1.0
<b>B. 世帯の生活は震災前と比べて</b>		
向上している	5.8	6.7
あまり変わらない	44.5	39.3
低下している	46.2	48.0
わからない	3.5	6.1
<b>C. 震災前より悪くなった最大の理由(一つだけ)</b>		
不況のため	26.8	57.6
震災のため	73.2	15.1
住宅再建・修繕など住居費の支出増	23.6	
失職・賃金カットなどによる収入減	22.9	
売上減少・廃業・倒産	14.7	
その他	12.0	
病気・退職など個人的理由のため		22.4
<b>D. 地域の住宅環境</b>		
震災前にほぼ戻った		69.7
あまり戻っていない		23.7
<b>E. 住居の変化</b>		
震災前と同じ所に		
住居を修理せずに住んでいる	22.9	18.3
住居を修理して住んでいる	43.0	36.0
住居を建て替えて住んでいる	7.0	7.2
震災前とは別の場所に住んでいる	18.3	25.4
震災後に神戸市外から転入した	5.2	10.0
その他	3.6	3.1
<b>F. 震災前と考え方や行動で変わったこと(複数回答)</b>		
他人との結び付きがたいせつと 考えるようになった	60.7	55.6
<b>G. 防災・防犯で不安を感じる事</b>		
大地震が再び起きるのではないか	60.5	61.1

### Ⅲ. 地震年度出生児の発育

#### A. 周産期

##### 1. 初産・経産の別

この項では、地震後3か月までの期間に生まれた新生児の初産・経産の別、妊娠期間、分娩方法、出生性比、性別出生時体重などの調査結果を前回調査の結果と併記して記す。前回調査の結果を併記する理由の一つは、前回調査の報告書に接する機会のない読者に便宜を図るためであり、他の一つは本調査の対象数が前回の8%に過ぎないほどの少数であるため、前回調査の結果と適正に比較できるか否かを検討するためである。上に記した項目のいずれについても両調査の結果には有意差を認めないので、本調査の例数は少数ではあるが、本項以外の項目についても前回調査の結果と適正に比較できるも

のと思われる。

初めての出産は全体の46%、2人目37%、3人目以上17%で初産と経産がほぼ半数ずつを占めていた(表Ⅲ-1)。

昨今では若い世代が結婚に消極的で晩婚に傾き、結婚しても必ずしも子どもをつくらぬので少子化に拍車がかかっているといわれている。出産全体の中で初産が占める割合を最近10年間について示した表Ⅲ-1aによると、兵庫県、神戸市、激地区のいずれにおいても上記の割合は震災の翌年に一時低下しているが、漸次上昇を続け、少子化がとくに都市部で進んでいる傾向を示唆している。

地震のあった年(平成7年、1995年)にお生まれになったお子さんについてお尋ねします  
問3. 何人目のお子さんでしたか。1 □初めて 2 □2人目 3 □3人目以上

表Ⅲ-1 初産・経産の別

	前回調査			本調査				計
	初産	経産	計	初産	経産	2人目	≥3人目	
激	175	144	319	13	13	12	1	26
	[55]	[45]	[100]	[50]	[50]	[46]	[4]	[100]
強	456	420	876	29	39	29	10	68
	[52]	[48]	[100]	[43]	[57]	[43]	[14]	[100]
軽	914	876	1790	59	78	52	26	137
	[51]	[49]	[100]	[43]	[57]	[38]	[19]	[100]
無	926	1014	1940	75	78	51	27	153
	[48]	[52]	[100]	[49]	[51]	[33]	[18]	[100]
計	2471	2454	4925	176	208	144	64	384
	[50]	[50]	[100]	[46]	[54]	[37]	[17]	[100]

表Ⅲ-1a 初産の占める割合(%)

年	兵庫県	神戸市	激地区
1992	46	46	51
93	47	48	52
94	48	49	53
95	48	49	52
96	47	47	49
97	48	49	53
98	49	51	54
99	49	51	56
2000	49	50	54
01	49	51	56

注. 兵庫県保健統計年報による。

##### 2. 妊娠期間と分娩方法

地震の起きた日から出産までの日数は、地震後3か月の期間に出産した妊産婦を対象として調査し、この間に日数が28日の2月を含むから

平均で42日となっており(表Ⅲ-2)、妊娠期間は38.6±2.3週と正期産の期間を示し(表Ⅲ-3)、分娩方法としては経陰の自然分娩が79%、吸引・

鉗子分娩が7%、帝王切開が13%で(表Ⅲ-4) 地区間に有意差はなかった。なお、表Ⅲ-4 a からは、帝王切開による出産が漸増しているよ

うにみえるが、本調査で認められた帝王切開の実施率はこの多数例観察の結果と比べて大差はない。

問4. お子さんの 1 出産日:平成7年( )月( )日 2 妊娠期間:( )週 3 性別:男 女  
4 出生時体重:( )グラム 5 分娩方法:自然分娩 吸引または鉗子分娩 帝王切開

表Ⅲ-2 地震から出産までの日数

激	47.8±28.9 (26)
強	41.8±27.6 (70)
軽	43.8±26.3(141)
無	39.7±25.1(153)
計	42.1±26.3(390)

注. 平均±標準偏差(人数)

表Ⅲ-3 妊娠期間(週)

	前回調査	本調査
激	38.7±1.8 (316)	38.6±2.0 (24)
強	38.8±1.9 (868)	38.8±2.2 (64)
軽	38.7±2.1(1772)	38.6±2.3(128)
無	38.7±2.0(1921)	38.5±2.3(140)
計	38.7±2.0(4877)	38.6±2.3(356)

注. 平均±標準偏差(人数)

表Ⅲ-4 分娩方法

	初回調査				本調査			
	自然	吸引・鉗子	帝王	計	自然	吸引・鉗子	帝王	計
激	247 [77]	33 [10]	40 [13]	320 [100]	22 [88]	1 [4]	2 [8]	25 [100]
強	708 [81]	61 [7]	102 [12]	871 [100]	57 [81]	3 [4]	10 [14]	70 [100]
軽	1347 [76]	206 [11]	227 [13]	1780 [100]	109 [81]	8 [6]	17 [13]	134 [100]
無	1509 [78]	194 [10]	234 [15]	1937 [100]	111 [74]	16 [11]	22 [15]	149 [100]
計	3811 [78]	494 [10]	603 [12]	4908 [100]	299 [79]	28 [7]	51 [13]	378 [100]

表Ⅲ-4 a 帝王切開の実施率

年	病院	診療所	全体	出産
1993	13.8	9.1	11.8	94412
96	14.7	9.9	12.6	96010
99	17.4	11.4	14.7	91056

注1. 「母子保健の主なる統計」による。

2. 病院～全体には出産全例のうち帝王切開の実施された割合を%で示し、出産は全出産数を示す。

### 3. 性別出生時体重

一般に出生時体重は男児が女児よりも重いことが知られており、表Ⅲ-5 に示すデータから算定すると男児は 3,071g±531g(161人)で女児の 2,983g±441g(162人)よりも重い有意差を認めるほどではなく、男女の出生数もほぼ同数であった。また、経産の出生児は初産より重いという一般則にも本表の数値は合っているが、その差は有意ではなかった。

地区間の比較をした結果、軽地区では無地区

より経産女児の出生時体重が軽く、その差は有意差に近かった(p≒0.05)。

なお近年、出生時体重は男女とも表Ⅲ-5 a に示すように年間約10グラムずつ減少しており、この原因として、いわゆる妊娠中毒症や難産を予防する観点から妊婦の体重抑制が指導されてきたこと、多胎児の増加、医療技術向上により早期出産児が生育する可能性が高まってきたこと、女性の喫煙率の上昇などが挙げられている。

表Ⅲ-5 出生時体重(g)

		初産	経産
男 児	激	2956±347(6)	3136±309(7)
	強	3045±388(9)	3292±401(13)
	軽	2880±630(22)	3177±600(28)
	無	3049±525(38)	3060±537(38)
	計	2992±527(75)	3139±525(86)
女 児	激	3052±353(7)	2943±407(6)
	強	3017±364(11)	3092±347(12)
	軽	2912±655(26)	2912±323(34)
	無	2930±400(31)	3099±450(35)
	計	2948±490(75)	3014±391(87)

注. 平均値±標準偏差(人数)

表Ⅲ-5 a 出生時平均体重(g)の推移

年	男児	女児
1992	3140	3060
93	3130	3050
94	3120	3040
95	3110	3030
96	3110	3020
97	3100	3010
98	3090	3010
99	3080	3000
2000	3070	2990
01	3070	2980

注. 「母子保健の主なる統計」による。

## B. 法定健康審査と指導

## 1. 1歳6か月児健康審査

1歳6か月児健康審査のさい指導や注意を受けたという回答は32例あった。表Ⅲ-6に示すように、該当者は激、強、弱、無地区でそれぞれ0、6、7、12%と、被災程度が軽いほど多い傾向が見られるが、地区間には有意差を認めない。指導・注意の内容としては、身体的発育の遅れや異常が26例、精神・知能面での発達遅延が5例となっている。発育遅延の中にはあらためて指摘されるまでもなく親が気づいている場

合が多いと思われるし、発達の遅れを指摘されて“ショックだった”と記した人もあった。一定の基準に照らして発育遅延を指摘することは容易であろうが、具体的な対応方法や親としての心構えを母親に納得させるような話術も、保健指導を担当する保健師としての技量の見せどころであろう。“時期がくれば――と不安を和らげていただきました”と付記した人もあった。

- 問5. 1歳6か月児検診のとき、お子さんの健康について医師または保健師から、とくに指導や注意を受けましたか。 1 □はい：その内容（ ）  
2 □いいえ 3 □1歳6か月児検診を受けなかった

表Ⅲ-6 1歳6か月児健康審査での指導や注意

	はい	いいえ	受診せず	計
激	0 [0]	25 [96]	1 [4]	26 [100]
強	4 [6]	64 [91]	2 [3]	70 [100]
軽	10 [7]	124 [91]	2 [1]	136 [100]
無	18 [12]	131 [87]	2 [1]	151 [100]
計	32 [8]	344 [90]	7 [2]	383 [100]

## 2. 3歳児健康審査

3歳児健康審査のさい指導や注意を受けたという回答は表Ⅲ-7に示すように激地区で20%あり、無地区の7%より有意に高い( $p < 0.05$ )。その内容は身体的発育の遅れや異常が22例、精

神・知能面の発達遅延が4例であり、1歳6か月児検診時に同じ指摘を受けた例がかなり含まれていた。

問6. 3歳児検診のとき、お子さんの健康について医師または保健師から、とくに指導や注意を受けましたか。1  はい：その内容 ( )  
2  いいえ 3  3歳児検診を受けなかった

表Ⅲ-7 3歳健康審査での指導や注意

	は	い	いいえ	受診せず	計
激	5	20	0	0	25
	[20]	[80]	[0]	[0]	[100]
強	5	62	3	0	70
	[7]	[89]	[4]	[0]	[100]
軽	11	123	1	0	135
	[8]	[91]	[1]	[0]	[100]
無	11	140	2	0	153
	[7]	[92]	[1]	[0]	[100]
計	32	345	6	0	383
	[8]	[90]	[2]	[0]	[100]

## 3. 就学(小学校入学)前健康審査

就学前健康審査で指導を受けたことの有無は表Ⅲ-8に示した。その内容は身体面が9例、精神・知能面が4例で、激地区での15%は強地

区の0%( $p < 0.01$ )や無地区の4%( $p < 0.05$ )より有意に多い。3歳児と就学前健康審査において激地区での指導・注意率が高いのは、震災

問7. 就学前(小学校入学前)検診のとき、お子さんの健康について医師または保健師から、とくに指導や注意を受けましたか。1  はい：その内容 ( )  
2  いいえ 3  就学前(小学校入学前)検診を受けなかった

表Ⅲ-8 就学前健康審査での指導や注意

	は	い	いいえ	受診せず	計
激	4	22	0	0	26
	[15]	[85]	[0]	[0]	[100]
強	0	70	0	0	70
	[0]	[100]	[0]	[0]	[100]
軽	7	129	2	0	138
	[5]	[93]	[1]	[0]	[100]
無	6	145	2	0	153
	[4]	[95]	[1]	[0]	[100]
計	17	366	4	0	387
	[4]	[95]	[1]	[0]	[100]

がなんらかの影響を及ぼしているのか、保健師が指導・助言に熱心であったためかは判然とし

ない。

### C. こどもの発育と健康状態についての評価

こどもの発育や健康状態に対する母親の評価は表Ⅲ-9に示すように、「よい」という回答は激、強、弱、無地区でそれぞれ28、41、36、27%と強地区で多い傾向を示したが、地区間に有意差はなかった。健康などについて気になる点としては、アトピー・アレルギー・喘息が24例、低身長が14例、肥満が5例などが多かった。

ホルモン異常などによる極度の低身長はとも

かく、身長的高低よりも健康であることを重要視し、健康であれば身長が低くてもかまわないという考えが広まってもよいのではなかろうか。

なお、前回調査と本調査の回答の間に見られる差については、地震のあった年以降に生まれたこどもの発育などに対する母親の評価を記した第四章のB項(22頁)で述べる。

問8. お子さんの発育や健康状態を、あなた自身はどのように感じておられますか。

1  よいと思う 2  普通だと思う 3  よくないと思う

4 お子さんの健康などについて、とくに気になることがあれば書いて下さい

( )

表Ⅲ-9 こどもの発育・健康に対する母親の評価

	よ い		普 通		よくない		計	
	'95	'02	'95	'02	'95	'02	'95	'02
激	199 [62]	7 [28]	117 [36]	17 [68]	6 [2]	1 [4]	322 [100]	25 [100]
強	509 [58]	29 [41]	363 [41]	41 [58]	12 [1]	1 [1]	884 [100]	71 [100]
軽	1011 [56]	48 [36]	760 [42]	85 [62]	31 [2]	3 [2]	1802 [100]	135 [100]
無	1058 [54]	40 [27]	866 [44]	105 [70]	25 [1]	5 [3]	1949 [100]	150 [100]
計	2777 [56]	124 [33]	2106 [42]	247 [65]	74 [1]	10 [3]	4957 [100]	381 [100]

注. 前回調査では「赤ちゃんの発育はいかがですか」と質問した。

## IV. 年少児(地震年度出生児に次いで 生まれた児)の発育

前回調査では地震の起きた1995年1月17日から3か月以内に生まれたこどもを対象として調査した。本章では、この3か月間に生まれたこどもに次いで生まれたこども(本報告書では「年少児」と略記する)を対象として調査した結果をまとめている。なお、前回調査で回答し

た妊産婦の中には、同年度(1995年)の末期にも次のこどもを出産した例はなかった。

表IV-1に示すように、地震年以後で同じ妊産婦が複数回の出産をしている場合があるが、表IV-2以降のデータでは初めに生まれた年少児1人に限って集計した。

### A. 周 産 期

#### 1. 地震年('95)以後の妊娠と出産の回数

表IV-1には年少児を妊娠および出産回数と、これらが3回以上の場合には3回と簡略化して計算したときの平均値および標準偏差を示した。さらに激、強、弱の3地区を合わせると妊娠回数は  $0.71 \pm 0.83(216)$  回、出産回数は  $0.91 \pm 0.52(141)$  回となり、いずれも無地区の回数より

有意に低い( $p < 0.01$ )。被災した激、強、弱の3地区はその大部分が都市部であるから、上記のように妊娠回数や出産回数が無地区に比べて3地区で有意に低いという結果は震災の影響なのか、地域性の反映であるかは即断できない。

平成7年生まれ(上記)の次にお生まれになったお子さんについてお尋ねします。

問9. 上記のご出産のあと何回妊娠・出産されましたか(現在妊娠中も含め・なければ0と記入)。

1 ( ) 回妊娠した(現在妊娠中を含む) 2 うち( ) 回出産した

表IV-1 妊娠回数と出産回数

	妊 娠 回 数					計	出 産 回 数					計
	0	1	2	≥3			0	1	2	≥3		
激	12	6	3	2	23	$0.78 \pm 0.98(23)$	5	8	2	1	16	$0.94 \pm 0.52(16)$
	[52]	[26]	[13]	[9]	[100]		[31]	[50]	[13]	[6]	[100]	
強	32	23	6	6	67	$0.79 \pm 0.94(67)$	13	23	6	1	43	$0.88 \pm 0.55(43)$
	[48]	[34]	[9]	[9]	[100]		[30]	[53]	[14]	[2]	[100]	
軽	60	51	13	2	126	$0.66 \pm 0.73(126)$	18	53	9	1	81	$0.92 \pm 0.44(81)$
	[48]	[40]	[10]	[2]	[100]		[22]	[65]	[11]	[1]	[100]	
無	55	54	28	6	143	$0.90 \pm 0.86(143)$	16	67	23	1	107	$1.06 \pm 0.51(107)$
	[38]	[38]	[20]	[4]	[100]		[15]	[63]	[21]	[1]	[100]	
計	159	134	50	16	359		52	151	40	4	247	
	[44]	[37]	[14]	[4]	[100]		[21]	[61]	[16]	[2]	[100]	

注. 実数データの右側には、平均値±標準偏差(人数)を示した。

#### 2. 地震年の出産から次の出産までの期間

地震年度の出産から年少児の出産までの期間は表IV-2に掲げたように4地区を平均すると

42.6月であるが、激地区の平均47.8月と無地区の39.7月には8か月の差があり、強・軽地区を

もあわせて概観すると、この期間は地震による被害の大きさに平行しているようにもみえる。

しかし標準偏差が大きいので地区間に統計学上の有意差は認められない。

問10. 次のお子さんを出産された方にお尋ねします。次のお子さんについて下表にお答え下さい。  
(出産された数だけ記入してください。記入欄の足りない場合は、余白に書き足してください)。

	出 産 年 月	妊 娠 期 間	性 別	出 生 時 体 重	分 娩 方 法 (ど れ か に <input checked="" type="checkbox"/> を つ け て く だ さ い )
1	( )年( )月	( )週	<input type="checkbox"/> 男 <input type="checkbox"/> 女	( )g	<input type="checkbox"/> 自然分娩 <input type="checkbox"/> 吸引または鉗子 <input type="checkbox"/> 帝王切開
2	( )年( )月	( )週	<input type="checkbox"/> 男 <input type="checkbox"/> 女	( )g	<input type="checkbox"/> 自然分娩 <input type="checkbox"/> 吸引または鉗子 <input type="checkbox"/> 帝王切開
3	( )年( )月	( )週	<input type="checkbox"/> 男 <input type="checkbox"/> 女	( )g	<input type="checkbox"/> 自然分娩 <input type="checkbox"/> 吸引または鉗子 <input type="checkbox"/> 帝王切開

表Ⅳ-2 地震の年の出産から次の出産までの期間(月)

激	47.8±23.7 (11)
強	47.2±29.0 (30)
軽	43.8±24.0 (61)
無	39.7±22.8 (90)
計	42.6±24.2(192)

注. 平均±標準偏差(人数)

### 3. 妊娠期間と早産の割合

妊娠週数は表Ⅳ-3に示すように、平均して38.7週という満期産の期間に収まっており、いずれも地区間の有意差はなく、また、震災年の妊娠期間(表Ⅲ-3)ともほぼ一致していた。

36週以前の早産が全出産に占める割合は全地区で7%に認められ、激地区での回答数は9例と少ないにせよ、早産の割合が0%という特異な結果を示している。表Ⅳ-3の右端には前回調査でアンケートによる回答と出生届から調べた結果の両者を併記した。一般論でいえば後者は前者より正確であろうし、前者よりやや小さ

い値を示しているが、その差はさほど大きくはない。実際にもとのデータについて検定を行うと、両者から得られた早産の割合には有意差を認めない。

これらの震災年度出生児に比べると、本調査の年少児について集計された前記の7%という早産の割合は、全国平均で早産が漸増していることを示した表Ⅳ-3 aの傾向を考慮しても大きな数値となっている。これが震災となんらかの関連をもっているか否かについては、さらに検討が必要である。

表Ⅳ-3 妊 娠 期 間

	妊娠期間(週)	36週以前出産の数と割合[%]	37週以後出産の数と割合[%]	計 [%]	前回調査・36週以前 [%]	アンケート 出生届
激	39.2±1.5 (9)	[0]	[100]	[100]	8	6
強	38.8±1.6 (27)	[7]	[93]	[100]	5	5
軽	38.8±1.5 (61)	[5]	[95]	[100]	6	5
無	38.6±1.8 (82)	[9]	[91]	[100]	6	5
計	38.7±1.6(179)	[7]	[93]	[100]	6	5

注1. 妊娠期間は 平均±標準偏差(人数)。

2. 前回調査の「アンケート」と「出生届」は、それぞれアンケートと出生届によって36週以前に出生した率を算出した。

表Ⅳ-3 a 早産の割合の年次推移

	早産の割合(%)
1980	4.1
85	4.2
90	4.5
95	4.9
2000	5.4

注. 「人口動態統計」による。

#### 4. 分娩方法

表Ⅳ-4には年少児の分娩方法を地震年出生児の場合(表Ⅲ-4 p.14)と併記した。

年少児が自然分娩で生まれた率は地震年出生

児と比べて各地区とも有意差はないものが高く、

帝王切開による分娩の率は表Ⅲ-4 aに示した

全国統計よりも低くてとくに問題はない。

表Ⅳ-4 分娩方法

	年 少 児				地震年出生児(表Ⅲ-4 再掲)			
	自然	吸引・鉗子	帝王	計	自然	吸引・鉗子	帝王	計
激	10 [91]	0 [0]	1 [9]	11 [100]	22 [88]	1 [4]	2 [8]	25 [100]
強	28 [90]	1 [3]	2 [6]	31 [100]	57 [81]	3 [4]	10 [14]	70 [100]
軽	49 [83]	4 [7]	6 [10]	59 [100]	109 [81]	8 [6]	17 [13]	134 [100]
無	71 [82]	3 [3]	13 [15]	87 [100]	111 [74]	16 [11]	22 [15]	149 [100]
計	158 [84]	8 [4]	22 [12]	188 [100]	299 [79]	28 [7]	51 [13]	378 [100]

表Ⅲ-4 a 帝王切開の実施率  
(再掲)

年	病院	診療所	全体	出産
1993	13.8	9.1	11.8	94412
96	14.7	9.9	12.6	96010
99	17.4	11.4	14.7	91056

#### 5. 性別出生時体重

地震年出生児を調査対象とした前回調査では初産と経産がほぼ半数ずつであり、その出生時体重を表Ⅲ-5 (p.15)に示した。本調査での年少児はいずれも経産であるから、これを前回

調査の経産による出生児の体重を比較したのが表Ⅳ-5である。年少児は地震年出生児と比べて男女とも出生時体重に有意差なく、また、地区間にも有意差を認めなかった。

表Ⅳ-5 年少児と地震年出生児(経産児)の性別出生時体重 (g)

	男 児		女 児	
	年 少 児	地震年出生児	年 少 児	地震年出生児
激	3091±565(5)	3136±309(7)	3133±441(6)	2943±407(6)
強	3173±406(17)	3292±401(13)	3201±425(12)	3092±347(12)
軽	3169±443(28)	3177±600(28)	3084±405(33)	2912±323(34)
無	3105±442(41)	3060±537(38)	3009±450(45)	3099±450(35)
計	3136±445(91)	3139±525(86)	3066±436(96)	3014±391(87)

注1. 平均値±標準偏差(人数)

2. 地震年出生児体重は経産児のみ表Ⅲ-5から再掲した。

## 6. 出産した医療施設

妊娠した時から出産を予定していた病(医)院で出産できたか否かを尋ねた結果は表IV-6に示すように、予定施設で出産できたという回答が前回調査では激、強、弱、無地区でそれぞれ60、78、89、97%であり、地震による被害の大きかった地区ほど出産直前になってから出産施設を変更せざるを得なかった実情を物語ってい

る(各地区間で有意差あり： $p < 0.01$ )。

これに比べると地震の翌年以後に生まれた年少児(表の'02)では、たとえば激地区で施設変更が40%から14%など、各地区ともずっと低くなっている。総例数が少ないこともあって、地区間には有意差を認めないが、年少児についても施設を変更した率は被災程度と平行している。

問11. 出産した病(医)院は妊娠した時から出産を予定していた病(医)院ですか。

1  はい 2  いいえ

表IV-6 予定していた施設で出産したか

	はい		いいえ		計	
	'95	'02	'95	'02	'95	'02
激	194 [60]	12 [86]	127 [40]	2 [14]	321 [100]	14 [100]
強	682 [78]	38 [90]	194 [22]	4 [10]	876 [100]	42 [100]
軽	1601 [89]	78 [94]	195 [11]	5 [6]	1796 [100]	83 [100]
無	1886 [97]	98 [96]	59 [3]	4 [4]	1945 [100]	102 [100]
計	4363 [88]	226 [94]	575 [12]	15 [6]	4938 [100]	241 [100]

## 7. 妊娠や出産で困った事項

年少児の妊娠や出産にさいして、とく困った事項としては、切迫早産・妊娠中毒症・つわり

などの産科学的障害が19件、離婚や年長児の世話など家庭上の問題7件がおもな内容であった。

問12. 次のお子さんの妊娠や出産の場合に、何かとくにお困りのことがありましたか。

1  はい：その内容( )  
2  いいえ

表IV-7 妊娠・出産でとくに困ったこと

	あり	なし	計
激	3 [23]	10 [77]	13 [100]
強	7 [21]	27 [79]	34 [100]
軽	11 [15]	60 [85]	71 [100]
無	10 [10]	86 [90]	96 [100]
計	31 [14]	183 [86]	214 [100]

B. こどもの発育と健康状態についての評価

年少児の発育や健康状態に対する母親の評価は表Ⅳ-8に示すように、4地区全体として、「よい」が37%、「普通」が61%で「よくない」は2%にとどまっており、地区間に有意差はなかった。健康などについて、とくに気になることとして、アレルギー性疾患、低身長・低体重、風邪をひきやすいなどが3～4例ずつ挙げられている。

同表で'95の下の数値は95年生まれのこどもの発育を95年に評価した結果であり、'02の下に'95出生児とあるのは95年に生まれたこどもを2002年に評価した結果である。つまり、同じこ

どもの発育・健康に対する評価であるから、両者の数値は本来なら近似するはずであるが、いずれの地区でも前者では後者に比べて「よい」という評価が高い率を示している。これはこのこどもたちが生まれて間もない95年には、震災による混乱の中で「よくぞ元気に育ってくれている」という感動から「よい」という評価が多くなり、同じこどもが小学生になった02年には母親が育児にも慣れ精神的にもゆとりができて、「まあ、そこそこ世間なみに育っている」という感じから「普通」という評価が多数を占める結果になったのではないと思われる。

問13. 次のお子さんの発育や健康状態を、あなた自身はどのように感じておられますか。

- 1 □よいと思う 2 □普通だと思う 3 □よくないと思う  
4 お子さんの健康などについて、とくに気になることがあれば書いて下さい

表Ⅳ-8 児の発育・健康に対する母親の評価(一部再掲)

	よ い		普 通			よ く な い			計		
	'95	'02	'95	'02		'95	'02		'95	'02	
		'95 年 出 少 生 児 児		'95 年 出 少 生 児 児			'95 年 出 少 生 児 児			'95 年 出 少 生 児 児	
激	199 [62]	7 5 [28] [38]	117 [36]	17 8 [68] [62]		6 [ 2]	1 0 [ 4] [ 0]		322 [100]	25 13 [100] [100]	
強	509 [58]	29 12 [41] [39]	363 [41]	41 17 [58] [55]		12 [ 1]	1 2 [ 1] [ 6]		884 [100]	71 31 [100] [100]	
軽	1011 [56]	48 22 [36] [36]	760 [42]	84 37 [62] [61]		31 [ 2]	3 2 [ 2] [ 3]		1802 [100]	135 61 [100] [100]	
無	1058 [54]	40 34 [27] [37]	866 [45]	105 57 [70] [63]		25 [ 1]	5 0 [ 3] [ 0]		1949 [100]	150 91 [100] [100]	
計	2777 [56]	124 73 [32] [37]	2106 [43]	247 119 [65] [61]		74 [ 1]	10 4 [ 3] [ 2]		4952 [100]	381 196 [100] [100]	

注. 前回調査では「赤ちゃんの発育はいかがですか」と質問した。

## V. 地震を回顧しての意見など

### A. "語り部" と "悪夢"

震災から3か月以内に生まれたこどもの大半は2003年に小学校の3年生となって、母親の話はすでに十分理解できる能力を備えているが、むしろ震災は全く記憶していない。このこどもたちに地震のことを話したことがあるかと尋ねた結果は、表V-1に示すように、激～軽地区では99%以上が「話したことがある」と答えており、無地区での語り伝えはこれらの地区より有意に低い( $p < 0.01$ )、それでも90%を超えている。当時の新聞、雑誌が母親の話を補足するであろうが、どの程度に実感できるだろうか。成長するにしたがい、また、当学会の刊行した妊産婦の文集「大震災 母と子」を読む機会があれば、震災時に母親の味わった苦勞への想いがさまざまに変わってゆくのではないかと思われる。

震災の心理的な後遺症がどの程度に残るかは個人の性格も関係するであろうが、震災のことを当時の妊産婦が夢に見たことの有無を尋ねた結果は表V-2に示すように、地震による被害の大きかった地域ほど震災の夢をたびたび見ていることがうかがわれる。

近年では犯罪者の検挙率が低下し、治安の悪化が社会的な問題となっているが、神戸市調査(p.12参照)では「防災・防犯で不安を感じていること」という質問に対して、神戸市民の6割が「大きな地震が再び起きること」を最も恐れており、少なくとも神戸市民に関する限り、身近で日常的な犯罪への恐怖より過去に体験した大地震の恐怖が脳裏に強く刻まれていることがうかがわれる。また、現在の高齢者のうち、相対的に若い年齢層は空襲など、長老層では戦地

問25. 震災の年に生まれたお子さんに、震災のことを話されたことがありますか。

1  はい 2  いいえ

表V-1 震災年に生まれたこどもに、震災のことを話したことがあるか

	はい	いいえ	計
激	24[100]	0[0]	24[100]
強	69[99]	1[1]	70[100]
軽	133[99]	2[1]	135[100]
無	139[91]	14[9]	153[100]
計	365[96]	17[4]	382[100]

問26. 震災当時のことを夢に見たことがありますか。

1  はい a  1度だけ b  2、3度 c  たびたび  
2  いいえ

表V-2 震災当時のことを夢に見たことがあるか

	いいえ	1度だけ	2、3度	たびたび	計
激	13[57]	0[0]	6[26]	4[17]	23[100]
強	47[67]	2[3]	16[23]	5[7]	70[100]
軽	79[62]	9[7]	30[24]	9[7]	127[100]
無	114[80]	6[4]	19[13]	4[3]	143[100]
計	253[70]	17[5]	71[20]	22[6]	363[100]

での体験を夢で戦後も長く引きずっている人が  
まれではない。震災の悪夢がすべての被災者か

らすっかり消え去る日は果たして来るだろうか。

## B. 経済的援助

地震による被災程度に応じて、なんらかの経済的援助を受けたであろうと考えられるが、援助を受けたものを地区別に見ると、表V-3に示すように、激地区でも29%にとどまっております。援助を受けたことの有無について強・弱および弱・無地区間にはそれぞれ有意差が認められる ( $p < 0.01$ )。経済的援助の対象となるような強度の被害を受けたものは被災後に転居した可能性が高く、今回調査で郵送されたアンケート用紙が宛て先不明で返送されたため回答できず、データとして集計できなかった例も少なくないのではないと思われる。

援助元団体は国や地方自治体からが半数余りを占め、会社・組合からと親戚・友人からがそれぞれ2割となっている。援助を受けたという回答者の中でその額を具体的に記したものは3割に過ぎないが、表V-4によると、平均32万円であり、個人差(標準偏差)はきわめて大きい。これはおそらく会社・組合または親戚・友人から

手厚く支援された個人が存在するためであろう。このような例外でさえ、住居が全壊・全焼した場合、復旧するための資金として援助額はあまりにも少ない。

家屋損壊の程度別に経済的援助をまとめた表V-5では、例数の合計が少ないのであまり参考にはならないが、国や自治体による経済的援助は原則として半壊以上に限られていたことを示している。

なお、上記のような返済不要の援助金でなく一定の期限内に返還することを前提とした災害援助金制度が作られた。しかし、日々の生活に追われて援助金を返還できないものが多く、融資を受けた56,000人のうち、2349人の死亡者と800人の所在不明以外に、1597人が自己破産しているほか、滞納者が少なくとも8000人おり(2003年3~6月現在)、償還期限の延長が求められている。

問27. 被災したために、国・地方自治体・個人・その他から経済的援助を受けましたか。

- 1  はい ( ) から ( ) 円 ( ) から ( ) 円 ( ) から ( ) 円  
2  いいえ

表V-3 経済的援助の有無と、どこから受けたか

	はい	いいえ	計	経済的援助元				計
				国・自治体	会社・組合	親戚・友人	保険	
激	7[29]	17[71]	24[100]	2[50]	1[25]	1[25]	0[0]	4[100]
強	17[26]	49[74]	66[100]	9[64]	2[14]	3[21]	0[0]	14[100]
軽	13[10]	121[90]	134[100]	5[50]	3[30]	1[10]	1[10]	10[100]
無	0[0]	146[100]	146[100]	0[0]	0[0]	0[0]	0[0]	0[0]
計	37[10]	333[90]	370[100]	16[57]	6[21]	5[18]	1[4]	28[100]

注. 実数[%]で示す。

表V-4 経済的援助額(万円)

激	24±19( 3)
強	50±60(10)
軽	10± 6( 7)
無	0± 0( 0)
計	32±47(20)

注. 平均値±標準偏差(回答者数)

表V-5 家屋の損壊状況別経済的援助

	経済的援助額(万円)	経済的援助元				計
		国・自治体	会社・組合	親戚・友人	保険	
全壊・全焼	102±67( 4)	4[80]	1[20]	0[ 0]	0[ 0]	5[100]
半壊・半焼	12± 8( 7)	9[82]	1[ 9]	1[ 9]	0[ 0]	11[100]
一部損壊	16±14( 8)	2[20]	3[30]	4[40]	1[10]	10[100]
被害なし	20± 0( 1)	1[50]	1[50]	0[ 0]	0[ 0]	2[100]
計	32±47(20)	16[57]	6[21]	5[18]	1[ 4]	28[100]

注. 経済的援助額は平均値±標準偏差(回答者数)で、その他は 回答者数[%] で示す。

## C. 被災直後の困難

被災した個人にとって家族の死傷は最も重い問題であり、これに次ぐ心労の要因は全半壊した住居の復旧という難題であろう。しかし、災害直後にさしあたって感ずる困難とはどんなことか。今後の大災害に備える参考事項として、これを問うこととした。

この問いに対する回答をまとめた表V-6によると、各地区に数名ずつ存在する無記入を除いた記入者全体を100としたとき、困難な事項が「なし」と答えたものは激、強、弱、無地区でそれぞれ8、25、39、73と被害の大きかった地区ほど低く、困難を感じた該当項目の延べ数を記入者数で割った該当項目係数、すなわち1人あたりの該当項目数(同表の右端)は激、強、弱、無地区でそれぞれ2.04、1.76、1.17、0.39と被害の大きかった地区ほど大きな数値を示し、地区間の差は顕著であった。

困難であった具体的項目として激～弱地区ではいずれも「入浴のできなかったこと」が1位であり、「ガスが使えなかった」が2位、「飲料水の不足」が3位となっている。大震災では

いわゆるライフラインのうち仮復旧までに要した期間は電気がおおまかに1週間、電話、水道、ガスがそれぞれ2、6、12週であったといわれ、ガスの復旧が最も遅かったので、家庭の風呂は浴槽の水を抜かずにおいても酷暑の季節以外は使用不能となり、薪などを燃料とする公衆浴場でも広い浴場のどこかに亀裂を生じ、応急処置をして開店すると、多数の入浴希望者が押しかけ長蛇の列。冷え込みの強い季節に1時間以上も行列したあげくあきらめて帰宅した人も珍しくなかった実情が上記の「1位」にあらわれている。とくに女性の場合、長期間にわたって入浴できなかった生理的不快感が強く記憶に残っているであろう。

無地区からの回答はこれら3地区とは異なり、「家族との連絡が取れなかった」と「その他」が1位を占めている。家族との連絡不能は激～軽の3地区でも6位に入っているが、これらの3地区では家族との連絡よりも緊急事態を切り抜け自分が生きてゆく上で不都合な項目が上位を占めていた状況がうかがわれる。

問28. 震災の年にお子さんを出産された日の直前直後（数時間～数日）に、とくにお困りになったことを次の中から3つ以内で選んでください。なければ最後の14に☑の印しをつけてください。

- 1 □住居の崩壊 2 □家族との連絡が取れなかった 3 □年長の子供の世話が困難だった  
 4 □食物の不足 5 □飲料水の不足 6 □入浴ができなかった 7 □ガスが使えなかった  
 8 □停電 9 □現金の手持ちが少ない 10 □電車・バスの不通 11 □かかりつけの病院が利用できなかった 12 □利用できる病院(医院)かわからなかった  
 13 □その他( ) 14 □なし

表V-6 震災直前直後に困難であった項目の記入者数と記入率[%]および該当項目係数

	住居の崩壊	家族との連絡不能	年長の子供の世話不足	食物の不足	飲料水の不足	入浴不能	ガスが出ない	停電	手持ちの現金が少ない	電車・バスの不通	かかりつけ病院が利用不能	利用可能の病院が不明	その他	なし	無記入	記入者数 A	該当項目延数 B	B/A
激	4 [17]	3 [13]	7 [29]	3 [13]	7 [29]	12 [50]	11 [46]	0 [0]	0 [0]	0 [0]	0 [0]	0 [0]	2 [8]	2 [8]	2	24 [100]	49	2.04
強	5 [7]	6 [9]	4 [6]	12 [18]	17 [25]	34 [50]	26 [38]	1 [1]	2 [3]	6 [9]	1 [1]	2 [3]	4 [6]	17 [25]	2	68 [100]	120	1.76
軽	5 [4]	15 [11]	16 [12]	22 [16]	22 [16]	34 [25]	24 [18]	4 [3]	1 [1]	4 [3]	0 [0]	2 [1]	11 [8]	54 [39]	4	137 [100]	160	1.17
無	2 [1]	15 [10]	5 [3]	7 [5]	4 [3]	4 [3]	5 [3]	1 [1]	0 [0]	1 [1]	0 [0]	0 [0]	15 [10]	109 [73]	3	150 [100]	59	0.39
計	16 [4]	39 [10]	32 [8]	44 [12]	50 [13]	84 [22]	66 [17]	6 [2]	3 [1]	11 [3]	1 [0]	4 [1]	32 [8]	182 [48]	11	379 [100]	388	1.02

注1. 記入者とは選択肢1～14のいずれかに印し☑をつけたもの。記入者の合計に対するそれぞれの選択肢に印しをつけた記入者の比率(記入率、%)を[ ]内に示す。

2. 該当項目係数は 該当項目延記入数/記入者数 で示す。

3. 記入項目は3つ以内で複数の記入を認めている。

#### D. 非常事態に備えて

震災のような非常事態に備えて実行している事項を尋ねた結果は表V-7に示すとおりであり、「とくにしていることはない」という回答も含めての記入率では軽地区が最も高いが、これを除いた対策実施率では回答者の半数近くがなんらかの対策を記しており、無地区に比べて強・軽地区は有意に高い(p < 0.01)。激地区は例数が少ないため無地区と有意差を認めない。

具体的対策としては、震災による負傷を予防するための「寝室にタンスなどを置かない」、「棚などの家具を固定」、「高所に落下物を置かない」のほか、非常袋・飲料水・インスタント食料の常備など常識的な事項が多く記されている。対策の「その他」には記入事項が1人だけの回答をまとめた。回答者のすべてが震災を機会として対策を始めたわけではない。「以前

問29. 震災の前と比べて、非常事態に備えるためにしていることがあればお書きください。

表V-7 非常事態に備えてしている対策

寝室にタンスなどを置かない	棚などの家具を固定した	高所に落下物を置かない	家財を減らした・重量物は安全な所へ	浴槽の水を翌日まで抜かない	非常袋整備・貴重品をまとめておく	飲料水・缶飲料を常備	缶詰・インスタント食品の常備	懐中電灯・乾電池の常備(枕元)	生活用品・保温具を常備	携帯電話を購入した	卓上ガスコンロの購入・ボンベ増加	懐中電灯・ラジオが決めた場所にある	車庫・小屋に水・ラジオ・懐中電灯	おカネ・携帯電話・車の鍵など枕元に	脱出しやすい服装	避難場所・集合場所を決めている	家族が同じ部屋で寝る	その他	とくにしていることはない			記入者数	無記入者数	人数合計	記入率(B/T)%	対策実施率(T A C)/T%
																			A	B	C					
3	2	2	1		1	2	2	3		2	1		1	1	1	5	2	15	11	26	58	50				
12	3	4		1	8	8	11	4	1	1			1	1	3	2	6	5	44	26	70	63	62			
14	6	5	1	2	12	12	15	10		4			1	6	1	3	28	105	36	141	74	55				
8	6	7	2	7	15	17	10	4	1	1	3	5	1	2	1	5	5	19	71	82	153	46	34			
37	17	18	4	10	36	39	38	21	2	8	5	5	2	3	4	15	3	19	54	235	155	390	60	46		

注. 対策の数値は各事項に対応する人数である。1人で複数の対策を記入している場合があるから、対策の合計は人数合計には一致しない。「とくにしていることはない」は記入者数に含めている。

から飲料水や懐中電灯を用意している。今も」という回答もある一方、「とくにはしていない」と記した中でも数人は「震災直後にはしていたが」と答え、「しなければならないと思っているが」と記した者も数人あった。棚を固定したというひとは「なるようにしかならないと思うが」と付記しており、「備えていてもあんな地震がきたら何も出来ない」「中途半端な備えは役に立たないことを知った」、という回答もあった。「浴槽の水を翌日まで抜かない」は非常事態に備える常識のひとつであろうが、この習慣をやめたと記したのもあった。理由は「幼児に危険なので」。

「その他」の中には「個性的」な記述が多く震災の体験や見聞に向き合った結果と推測されるものが目立つ。「タオルケットを備えている」

は自宅の全壊した者、「ガス以外の暖房器具も購入した」は激震地の被災者、「保温用に衣類タオルケットを車に置いている」という回答も厳寒の季節に冷え込みの強い避難所で味わった辛さから得た教訓であろうか。「アウトドア・グッズを備えた」というのもあった。自宅が全壊した知人から編集者の一人が聞いた話では、この人は震災前から枕元に懐中電灯を置いて寝ることを習慣としていたが、震災時の激しい揺れて懐中電灯が吹っ飛んだまま見当たらなかったとのことである。重いテレビでさえ激震地では部屋の端から端まで吹っ飛んだという話が何度か報道されたから、枕元の懐中電灯などはふとんの下へ常備するような配慮も必要であろうか。「脱出しやすい服装」では「就寝時も逃げ易い服装」、「靴を枕元に置く」などが記され

ており、空襲を知らせるサイレンを連日のように自宅や軍需工場で聞いていた戦中世代のひとりである編集者は、ズボンをはいたまま就寝するのが常識という戦争当時を想起させられた。「生活必需品をガレージに置いている」と記した激震地の2人は、地震で家屋が崩壊すると、せっかく常備していた非常袋や飲料水も取り出せないという実情を震災から学んだ結果かと思われる。単に「懐中電灯の常備」でなく、「懐中電灯は家族の各自が備えている」も震災をより具体的にとらえているという印象を受ける。「全家族が同じ部屋で寝るようになった」という回答のひとつには、その理由として「助かるのも死ぬのも一緒」と記されていた。

関東のある都市（県庁所在地）では阪神・淡路大震災による破壊のすさまじさを知った市当局が、「このような巨大災害時には生活必需品を行政側から被災者へ速やかに届けることは不可能だから、平素から数日分の飲料水や食料を各自で蓄えておくように」という広報を出したとその市の市民から聞いたことがある。災害に対して行政があっさり手を挙げたと批判されかねないような気もするが、住民各自が当面の生活必需品を平素から備蓄しておくことは災害対策の基本のひとつであろう。

震災死亡者の8割以上は崩壊した木造家屋による圧死とされており、建築後20数年以上を経過した（建築基準法の改正で家屋の耐震性が強化される以前の）地震に弱い民家が多数存在しているという実情から考えると、これらの古い木造家屋を補強することが今後の大震災による犠牲者を少なくするため必須であることは震災後にたびたび指摘されてきたが、「地震で壊れない家に住む」（注。新築したのか、補強したのか詳細はわからない）と記されたもの以外は

家屋の補強を実施したという回答がなかった。この補強には通常数百万円かかるという経済的理由が大きな隘路となっているが、崩壊した家屋が道路をふさいだため救助活動を妨げたこと、崩れた家屋の撤去作業や被災者を収容する仮設住宅の用地確保・建設・維持などに必要な費用に比べると老朽化した民家の補強費を援助する方が安いと判断した横浜市では、個人所得に応じた補強費の援助という思い切った施策に踏み切っている。しかし国も地方自治体も膨大な赤字を抱えているため、「治療より予防」は一般には実行されないでいる。東海地震の危険が唱えられている静岡県などでは「家は全壊しても、居住者は死亡を免れる」という最低目標を満足するとともに補強費用が百万円以下の改修方法が検討されている。

大地震では医療機関も破壊され、たとえ建物の外形が保たれても電気、水道水、ガスなどの供給が断たれるので診療不能となる場合が少なくない。このようなひどい破壊が起きた激震地域ほど多数の負傷者が生ずるので、被災していない周辺部の医療機関へ患者をヘリコプターで輸送する訓練がテレビで放映されたことがある。10人余りを運べる大型機を使ったこの訓練に参加した医師は、これなら大地震が今後起きても大丈夫と満足気であった。阪神・淡路大震災の経験者でない人たち（上記の医師もそのひとり）は心強い手段という印象を受けたことであろう。建物の倒壊や火災が随所で起き、ヘリコプターの着地できる空き地は避難者で満杯という状況に加えて、道路には自動車があふれ、交通整理に乗り出したパトカーも、人命を救うべき救急車や消防車も交通マヒの渦に巻き込まれて動きがとれなくなってしまった実情を見聞したことのない人には、突発的な大災害時にヘリを着地

させる場所が確保できるか、そこまで患者を運べる手段があるかまで思考をめぐらすことは無理と思われる。

一般車両が道路にあふれたため救急車などの緊急車両が本来の任務を果たせず、助かるはずの人も助からなかったという過去の実情を教訓にするなら、次のような対策を平素から検討し実施する必要がある：①全車両を緊急車両から一般車両(いわゆるマイカー)までいくつかの階級に分類し、階級をナンバープレートに成型(ラベルは不可)明示する。②災害の程度に応じて被災地域内では特定の階級以下の車両は一律に通行を禁止する。阪神・淡路大震災の時には、緊急車両であることを示すラベルが公安委員会の発行したものだけでも4種類、複写偽造したものもフロントガラスに貼られ混乱に輪をかけた。どの種の車両をどの階級に位置付けるかは利害の対立を伴うから意見をまとめるにはひまがかかる。平素から車両規制法を国のレベルで検討し「泥縄」にならないよう望みたい。

ヘリコプター訓練に参加した上記の医師がこれなら大丈夫と安心したのは、阪神・淡路大震災の具体的経験がない人であるからやむを得ないとしても、激・強地区での被災体験者数人が、震災後急速に普及した携帯電話を購入したから今後は大災害時でもすぐ連絡が取れると本調査の質問に回答していた。当時は軽地区でも電話が不通になったことは、もう忘れられてしまったのか。それとも据付電話とは違って、ケータイはいつでもどこでも使える魔法のじゅうたんのような感覚を使用者に与えているのだろうか。

1970年代に神戸市当局が地震学者に委託した六甲山周辺の地震調査で、その報告書には阪神・淡路大震災の実際を予測したような内容が記されていたのに、当時の市当局幹部はこれを黙殺

し市民になにも知らせなかったことが大震災後に明らかにされた。このような場合、「住民の不安をあおるおそれがある」というのが行政側の釈明する決まり文句であるが、この点で東京23区の一地域で行われた集団避難訓練は教訓に富んでいる：300人ほどの区民が約1.5キロ離れた学校まで避難しようというこの訓練で、事前に検討された最短コースを責任者が地図に書き込んで先導し、車椅子の老人がその後ろに従うという真剣な雰囲気がかがわれた。ところが、定刻に出発した住民のグループとは違う別動隊がこの訓練には「隠され」ていた。地震のため起きる火災は時間の経過とともに広がると訓練の立案者が想定し、その指令に従って別動隊が火災のためこの先は通れないと記した大きな紙で避難群の行く手を阻んだ。避難群はやむなく左折して進んだところ、今度は家屋倒壊のためここは通れませんという指示紙に阻止された。逆戻りして別のコースをたどってゆくと、その先には別の火災が「発生」していた。先導者は地図を手に行っているものの、そこはもう地理を熟知している自分たちの町内からほど遠いヨソの土地でありすっかり困惑した。訓練の上では全員焼死。大震災が起きた時、自分たちの居住地はどんな環境にあるかを知った住民は、この訓練で十分に「不安をあおられた」に違いない。大地震のさいには何か所ほど火災が発生するかという予測に基づいて実施されたこの訓練で、予定の避難場所へ到着できるコースを安全の専門機関に後日検討してもらったところ、広い幹線道路をたどって迂回すれば避難できるという結論を得たとのことである。

東南海地震と南海地震(摘録を参照)が同時に発生した場合の想定死者数7400人は阪神・淡路大震災の死者数を上回るが、これには火災

や津波による死亡者数は含まれていないから、実際にはもっと深刻な被害も予想される。すでに記したとおり、地元の地震について調査研究を委託しておきながら、その結果は無視して市民に公表もしなかった自治体では、阪神・淡路大震災の起きる年まで消防・警察・保健所など、

おもに救援救急関連の公務員のみで年1度の形式的な地震対策の訓練をしていた。最近は将来起きると予想される大地震の実態について、専門集団からさまざまな情報が提供されるようになった。災害に備える訓練は、これらの情報を受け止めたものにしなければならない。

#### E. 妊産婦の震災体験など

「問30 震災があなたやご家族に与えたもの(よいことも悪いことも)など、震災や災害一般についてお考えになっていることを自由にお書きください」という質問に対して寄せられた回答を以下にまとめた。この質問に対して、「寝室にタンスなどを置かない」といった問29への回答を記した例がいくらかあった。これらについては、表V-7(p.27)の該当部分と「記入者数」に加算し、問30の集計からは除いた。

問30に対して表V-8に示すように、213人が

なんらかの回答を記入した。このうち、95人が記した全文または一部を下記の「 」内に紹介する。読み違えをされるおそれのある誤字など以外は原文のまま転記し、配列は激・強・軽・無地区の順に、また、各地区の中では出産日の順とし、地震の起きた日(1月17日)から1・2か月後ごとに段落をつけた。( )内は(震災時の居住地区/現住地区 出産した月/日)で、図1(p. i)に示した10市10町以外の地域には市または郡を添えた。

表V-8 自由記述に応じた人数と転記した人数

地 区		激	強	軽	無	計
回答(返送)者数	A	26	70	141	153	390
自由記述をした人数	B	17	44	79	73	213
記 述 率(B/A, %)		65	63	56	48	55
転記の対象者数		12	22	31	30	95

#### 1. 激地区の妊産婦

「当時、年少だった上の子が情緒不安定になり奇行をした。自分ではさみを使い髪を切ったり、神戸の病院にこわがって行きたくないと泣いたり、数年でおちつきをとりもどしたが、やはり震災の後遺症ではと」(灘/姫路市 1/27)。「当時、水、ガスが全く使えなく(電話も)、上の子(当時11ヶ月)の世が大変でした(年子だったので)。交通状態もマヒしていた為、食量と水で大変困りました。下の子が生まれてか

らは、おむつにミルク(母乳が全く出なかった為)を手に入れるのが困りました。主人も四日市に住んでおり、私は実家(長田区)に帰っての出産だったので、ずっと離れていた為、上の子の精神状態もかなりストレスになっていました。実家の方も親戚の人が13人も来て、1ヶ月程一緒だったので大変でした(みんな近所で長田区在住、みんな全壊)。震災直後におなかがはってましたが、病院(ポーアイ)まで行くのにすごく

時間がかかると言われた為、臨月の検診もいけないまま2週間頃過ぎた時に夜中に車で病院まで行き、3000gあった為、即刻出産しますと言われ2週間早かったけど産みました。今、思うと、何もかもが、メチャクチャでした」(長田/東灘 1/30)。「1人だと心細かったと思うが、主人の母と義姉が一緒だったので、心強かった(お互いに協力できることをした)。ガスが使えたのが一ヶ月後だったので、退院後1ヶ月程大阪の実家に戻っていた。震災後出産するまで2回しかお風呂に入らなかった」(東灘/東灘 1/30)。「水がなくガスもなく交通手段もない。電気が何日か後に使えたけれど、いつも何げなく生活しているけれど、とてもめぐまれている時代に自分は生まれ育ったのだと初めて分かりました。見知らぬ人からの救えん物資、ありがとうございました。このアンケートを記入するに当たって、再度震災を振りかえり、人のぬくもりを思い出しました。私で良ければ、何度でも答えますので、役立てればうれしいです。こちらこそありがとうございました」(灘/垂水 1/31)。「震災により夫が仕事にかかりきりとなり(通勤困難や勤務先が震災の影響を受けた為)、子供達とふれ合う時間がなく(特に震災後出生した子と)子供達と父との間に溝ができてしまいました。その後、積極的に子とかかわるよう夫に努力してもらい、今はかなり改善されました」(灘/灘 2/10)。

「H7に産まれた次女は体に障害がありますが、震災に負けにくいくらいのすばらしい生命力で産まれてくれて、そして又、違った形で愛をくれました」(長田/長田 2/25)。

「良い事など1つもない。生活の安定はないし、今、最悪です」(東灘/東灘 3/18)。「近所

で何人の方が亡くなりましたが、すぐに三木市に避難したので、不自由もなく出産できました。けれど、36週で新居へ荷物を入れたので、出産後、疲れが一気にでてしんどかった記憶があります。震災後、少しの地震でも心ぞうが口から出そうなくらい恐く、「この小さな揺れがおおきくなるのでは――」と体が硬直します」(長田/西 3/26)。「現在の便利な生活のなんとはいかない事かと思った。あらためて電気・ガス・水道のありがたさと大切さを感じた。同時に限りある資源を大切にしなければならない事を子供におしえたい」(東灘/東灘 3/28)。「家族一人一人のたすけあいは充分に感じましたが、すごく全員がストレスがたまって、小さな事でケンカになったり、不安一杯の私に対して配りよがないとさえ思える事があり、人間の自分勝手を家族でさえ思う事がありました」(灘/灘 4/12)。「夢には見ないけれど、また地震が来たらと考えるだけでも精神的にはかなりつらい。今は子供もいるので、学校に行ってる時など、離れている時などは心配しだすと止まりません。いつまでも消えない恐怖をかかえています」(東灘/東灘 4/13)。「今後二度と経験したくない(子供達の将来にも)といつも思いながら生活していますが、万一あの様な大きな震災が起きたとしたら、色々な訓練もむなしく、たぶん前の状態とかかわらないのではないかと思います。(別件ですが、あんな悲惨な状態の中でも、食料品物資等の大量の取り込みなのか横流しなのか見た事があります。そのために大変お困りの方もあったのではないかと)」(長田/長田 4/15)。

## 2. 強地区の妊産婦

「地震の時は分娩台におり、出産直後でしたが、母子とも死の恐怖を感じました。家族とは連絡がとれず 実家は半壊で、産後里帰りもできない状態でした。病院は建物は大丈夫でしたが、ガス・電気・水が止まり、予定通りの間、入院はしましたが、赤ちゃんは産湯も使わずのままでした。ホ乳びんの消毒もできず、おむつも裏まで使いました。トイレもちろん水が出ませんでした。家に帰ってからもガスが止まっていて、私が産後はじめてシャワーをあびたのは3月の終わりごろです。電車も途中の駅までで止まっていたので、主人は大阪まで買い出しに行くのに大変苦労していました。道は大変渋滞していて買い物に行けませんでした。私は無理をして出血がひどくなりました。大変な思いをしながら家族がいままで一番団結した時だったかも知れません」(西宮/西宮 1/17)。

「人間は簡単に死んでしまうのだと感じました。上の子はその日、命をさずかりましたが、一つ違うと生れてこれなかった様な気がします。そのせいか、父や母は孫が生きる希望になると励みにしていました。主人は仕事が忙しく、家も親戚の家で、今考えると私は気力がなくボーッとしている日々を送ってました。皆様に良くして頂いて、私一人では子供を育てたり生活したり出来なかったと思います。災害は突然やって来て、人々を恐怖に落としきれますが、そんな時でも、子供の前では笑顔で心配させない様に精神力をきたえて行きたいと考えています」(中央/須磨 1/17)。

「子供は水もガスも出ない大変な時に生まれて来て、いろいろな人達に助けられた事などを話しています。命の大切さや自分一人では生きていけない事などわかってほしいです。生まれた時に水もなく消毒液でふかれ

ただけだけれど、元気に成長している我が子を見て、“生まれて良かった”と実感しています。又、その当時4才でした娘は、地しんの事には触れたがりません。地震にかんする事はイヤみたいです。娘は地震後1週間程、声がかすれていました。もうあんな経験は二度としたくありません」(西宮/西宮 1/21)。

「震災後、妊娠しましたが、出産後、精神状態悪く、又、恐い事が起きるかも思ったり一年位2人の子供が無事すごせるのか不安で、残念乍ら中絶しました」(西宮/宝塚 1/21)。

「自分が震災を経験したにもかかわらず、遠い外国の災害に対して気の毒には思うがあまり身近には感じられず、薄情なものだと思ったりします。自分の経験上、家族の絆、地域の人たちとの関わり合い、という人間関係が災害時に大きな力になると確信しました」(西宮/西宮 1/24)。

「被災者に対しての国からの補償があつてしかるべきだと思います。阪神大震災では多くの人が家や仕事を失いましたが、国からの補償もなく、生活再建を自力でするしかなく、いまだに本当の再建ができたとは言えないと思います」(西宮/西宮 1/28)。

「震災で前の病院では産めなくなり急に転院させられたので、出産が大変で、次の子を産もうと思えるまでに長い時間がかかった。主人が実家の近くが安心だと言って、出産予定日間近で車で2時間の所まで移動したのはすごくいやだった。結局、ガス等が復旧するまで主人の実家でくらししたので、いまだに何かあると、あの時いなかったからとか手伝ってもらえなかったとイヤミを言ってしまう。主人はアパートから会社に通っていたので、実家にはめったに帰ってこれなかった」(西宮/篠山市 1/31)。

「震災で生活感が変わり、家族が同じ部屋で寝る様に

なり、以前はマンションだったので半壊という  
ことで、多額の修理費をとられました。主人は  
転職せざるをえなくなり、食糧の他、現金をもっ  
ていなければ、生きれないと考える様になりました。  
子供達に関しては、とにかく元気が一番  
少しかぜ気味でも病院へ走る様にしています」  
(宝塚/宝塚 2/9)。「震災の時、予定日を1ヶ月  
以内に控えており、里帰り出産の為にインスタ  
ント食品を主人の為に備えていたのが、違う意  
味で必要になった。非常時用に備えておくべき  
と痛感した。実家の病院では神戸市内で被災し  
ていた妊婦たちを原則を破って保証人無しで受  
け入れ、出産に応じていて、素晴らしいと思っ  
た。宝塚でこれと言った被害は受けなかった私  
ですが、一時は体内の子供が全く動かなくなり、  
不安で仕方なかったが、柔軟な対応の出来る病  
院で、余震の度に看護婦さんが、新生児のベッ  
ドにおおいかぶさり守ろうとする姿を見て、心  
から安心し、感動した。地震を思い出すと、と  
ても恐いけれど、たくさんの人に守られて今が  
あると実感出来て、今は冷静に受け取めること  
が出来るようになりました」(宝塚/宝塚 2/10)。

「やはりライフラインの断たれたことが、ほ  
んとうに妊婦にとりつらいものでした。お洗濯  
も手洗い、給水車を外で待つなど、9ヶ月の私  
にとっては腰痛が出てたのでつらい経験でした。  
災害時にはライフラインは、すぐ確保されなけ  
ればと痛感しました」(中央/中央 2/20)。「た  
くさんの方々に心配して頂き、本当にありがた  
かったです」(兵庫/兵庫2/28)。「今となって  
財産の損失は残念なものであったと思いますが、  
当時なんとか平常心で無事出産できた事、現在  
も息子が元気に成長してくれている事を心より  
嬉しく有難いと思っています」(西宮/東京都杉  
並区 3/4)。「震災は天災であって、起こっても

しかたのない事だと思う。予防策といっても、  
普段生活をしていく上で、防ぎきれないものも  
ある――ただ、地震が起きたら、まず、水の  
確保！ 家さえ大丈夫であれば、あとはなんと  
かできる。よく、荷物をもって逃げるという人  
がいるが、それは二の次。家が安全で、意識が  
あれば、すぐ逃げられるし、命の前には荷物は  
二の次。まず、普段から命を大切にすること、ど  
うすれば安全かという事を考えるべきです」(宝  
塚/宝塚 3/5)。「1才2ヶ月の子と、お腹に妊  
娠8ヶ月の子がいたので、早朝で主人がいたの  
で助かりました。私一人だと、どうしていたか  
と思う。とにかく、助け合う事、人のためにな  
ることを今でもしようと思っている。とにかく、  
3人の子どもたちと主人が元気でいてくれるだ  
けが幸せです。ふつうのくらしができることが、  
どんなに幸せなことかと思えます」(西宮/西宮  
3/9)。「私と夫は不便になっても耐えられるが、  
小学生と中学生の子ども達もよく耐えてくれた  
と思う。飲料水はほとんど子供達が運んでくれ  
ました。家族の協力がすごかった」(西宮/西宮  
3/15)。

「震災後、マンションの倒壊や修理などをめ  
ぐって、面倒だった話を見聞して、集合住宅で  
はなく、一戸建てで暮らしたいという思いは強  
くなりました。世の終わりかと思われた当時の  
様子も、すっかりまた暮らしやすく整ってきて  
人や社会は立ち直って進展し続けるものだと思  
胸はついたかもしれません」(西宮/西宮 3/17)。  
「全く予期していなかった出来事であっただけ  
に、日頃から地震等の災害に備えて話し合うこ  
とが必要だと思った。震源地に近い所に住んで  
いたが、大きな被害もなく命があったことは全  
く幸運なことであったと感じている」(津名/津  
名 3/17)。「地震のことは家族の共通の思い出

ですが、どういう受けとめ方をしているか、あまり話題にしません。人として生きるのに最低何が必要か学んだ気がします。丈夫な家と健康な体と思いやりの心だと自分では思い到っています。私は地震をきっかけに仕事を辞めて子育てに専念することになりましたが、この8年思い返すと、これでよかったという気がします。地震とそれに付随する様々なトラブルも、今となっては貴重な体験であったと思います。人間、命さえあればどんな苦しいこともいつか乗り越えることができると実感しました。こういうことを思い出す機会を与えて下さって良かったです。せつかくの機会ですから、被災と子育てについて思っていることを書かせて頂きます。地震当時生まれた子どもは現在小学2年生になります。私が子どもを通じて知り合ったお母さん方の中には、「地震の4日後に生まれた時、あ〜どうしてこんな時に生まれるの?と心の奥でさげんだ」という人、「子どもが生まれて、しばらくして実父が過労死で亡くなり、とても悲しくて、子どもがどんな風に大きくなったかあまり覚えていない」という人、それぞれに子育てしにくいと悩んでおられました。産後のしっくりいくべき時に十分に愛着関係を作る環境になかったこともひとつの原因と思われる。私自身も自分がとても恐い思いをしたこと、産後も色々大変だったことが、子どもにずい分影響を及ぼしているだろうと考えながら育ててきました。しかしそんなことをお母さん方にへたに話してもショックを受けられるだけで何のフォローもできないので、はっきり話したことはありません。子どものクラスの中でも問題行動のある子どもさんを見るにつけ、そんなことを考えるのですが、医学の上では、妊産婦の母子関係について、どのように考えておられるのでしょ

うか? 大きな災害でお母さんの心の傷が乳児にどう影響するか、どんな手助けができるか、そんなことがもっと常識的に広まるようであればいいのにと考えています」(須磨/須磨 3/28)。「妊娠中におこったできごとで、非常に感じやすい時だったので、すごく精神的にまいりました。すごくゆれにびんかんになり、少しのゆれにでも恐くて不安になってしまっている。トラウマというのか、こわくてゆれがたえられません。妊娠中の人に心のケアが必要だったのではと思います。こんな方が多いのではないのでしょうか。これからのケアに期たいします。今後の災害の時にどうぞやくだて下さい」(芦屋/芦屋 4/2)。「震災は本当に辛い思い出ですが、その経験が初めての子育ての中で「元気に育ってくれば十分だなァ」とか、「いつ何があるかわからない分、子どもと一緒に楽しくすごせる事を感謝しよう」等、思えるようになったと思います。又、兄弟がいた方が助け合って生きていけるのでは――とも思い、もう一人生めました。(このアンケートで)忘れがちな日々の中で今一度初心を思い出させて頂くような機会を与えられました事を感謝いたします。ありがとうございました」(西宮/西宮 4/6)。「長田の方で生きたまま焼け死んだ人の事を聞き、すごくショックだった。海がすぐ近くにあるのに水の無いこわさを思った」(須磨/須磨 4/8)。「震災では、うちは一部損壊でしたが、両どなり、むかい、裏とまわりの家が全部つぶれ、その解体時のほこり、新しく建つ時の騒音、ものすごいものでした。生まれたばかりの子は騒音のため寝ないし、震災のため出向することになった主人の仕事は夜勤がほとんどで、騒音のため眠れず身体をこわし、最後はぜんそく発作で亡くなりました。子供もぜんそくで、入退院をくり返

しています。震災とは直接関係ないのかもしれませんが、もし、あの震災さえなかったら――

### 3. 軽地区の妊産婦

「日頃の訓練とは全く違った。経験した者でないと対応の仕方などわからないと思う。後世にうまく伝えていく事ができればいいなあと思う」(明石/明石 1/19)。「助け合う大切さ、助けられるありがたさを痛切に感じた。しかし、被災者に対して甘やかすボランティア等、援助してくれる人々に甘えるのではなく、心や体のサポートに加え、自立していくべき距離がお互いに必要であると思う」(垂水/垂水 1/19)。「近所の方との協力・連携・コミュニケーションが深まった。お金より大切なものは何よりも家族の命・健康であることを再認識しました」(伊丹/伊丹 1/23)。「一年間、原因不明のしっしんが主人に出来たことにより、又、年れいのこともあって、次の子の出産を考えるよゆうがなくなった。その当時は、何が起こるか、わからない世の中に、子どもを産み育てる自信がもてなくなった。今となっては、もうひとり産んでおいた方がよかったかと思う」(三原/三原 1/26)。「人生観が変わるぐらい大きなできごとであったが、8年近くたって今はもう忘れかけている」(川西/川西 1/26)。「たまに地震があると、全身が震え、身がまえてしまう。身重だった私は地震のあったあの日、上の子(4才)をかばうのにやっとならした。自宅にいて、産後は母が自宅へ来てくれるようになって(2人目という事もあり)、あれが1人目だったら実家である芦屋にて震災にあっていた。実家は2Fがとくにひどく、私達がもし行っていたら家具の下じきで、誰かケガをしていたと思う。ケガではすまなかったかもしれない。運命的な物も感じ、人生とは紙一

と思わずにはられません」(西宮/西宮 4/12)。

重だと実感した。あんなに連絡がとれず不安になったのも始めて。あれがきっかけで家族の絆が深まった様な気もする。健康な人はあの震災の時、生活できればそれでよかったが、病人などをかかえていた人は大変だった事と思いました。かかりつけの病院に拒否されたら、今勤めている病院の患者さんに聞いた話では、震災のその日に入院する奥さんがいて、普段通りになるまで入院はできないという事で入院が遅れ、手術が遅れ、生命をおとされたと聞きました。震災のその時が元気でも、それが原因になるという事は多々あったと思います。私自身も上の子の産まれた病院でと思っていたのに結局遠まわしに電話にて拒否され新たに探し、不安に不安を重ねた日々でした。でも、まだ産まれてなくてよかったとも思いました。産まれたての子があの時いたら、又、苦勞したと思います。前のアンケートに答え、本が出て、又、この度アンケート。どう思われている方がいらっしゃるか知りませんが、私は何だかうれしくなりました。一生懸命取り組んでいる気持ちが伝わり、決して過去の事にしてしまわず、今後に役立てようと思われている姿勢に感謝と期待を持っております。アンケートを回収した後、1枚1枚目を通し、大変な作業とは思いますが、どうか頑張ってください」(垂水/垂水 1/28)。「近隣との親しいおつきあいや家族のきずなの大切さを知った」(西/西 2/3)。「1/27が予定日でしたが、震災当日、おなかのハリと痛みと、赤ちゃんのあばれ回る動きに苦しかったのを覚えています。今、生まれても対応に困る病院に、とりあえず

実家へもどり安静に。2/3 の出産日にはお湯がつかえず、食事もレトルトで困ったが、もっと困っている人々がいる、私はまだ幸せだとTVを見て実感した。物音に敏感で、エンピツが机からおちてもビクッとてすぐ泣く。2才半まで夜泣きはひどく、私は妊娠前より 10kg もやせてしまった。しかし今、小学生(2年)となり、大変感受性の強い子に育っています。無事出産でき、そして生きていることを心から感謝しています」(西/明石 2/3)。「関西は地震が少なかったのが、本当におどろき、何をしたら良いのか、パニックになりました。しかし、日がたつにつれ、落ちつきを取り戻し、それなりに知恵を使って生活できることがわかり、人間は本当にタフだと思いました。忘れてはならないけれども、日々の生活に追われる様になり、非常事態にそなえての用意ができていないのも現実です」(明石/明石 2/3)。「次男は地震(阪神大震災)のことに興味を持ち、写真集や本を読んで知りたがります。私自身、大変な被害をこうむったわけではないのですが、知りあいの方が亡くなったりして、やっぱり話を聞かれるとつらいので困ります。次男が通っている音楽教室のお友達(H6. 11月生)が震災をテーマに曲を作り、今2人で合唱したりしているのですが、「ぼくが生まれた年に神戸にかいじゅうが来たんだ - - 」で始まり、その歌を聞いたたびに涙が出てしまいます。次男の年齢の分だけ、あれから時間はどんどん過ぎていますが、この子が「地震の時のこと話して？」と聞いてくる度に私は不機嫌になってしまうので、いつになれば、ちゃんと話してやれるのか、今はまだわかりません」(西/西 2/6)。「自分達は大丈夫 - - という考え方が変わり、子どもも出来た今は、やはり家族のことが一番心配で、特に子供には非

常事態の対処方法など、よく話してき聞かせるようになった。又、自分がいつ死ぬかもしれない - - と言う、現実もよく考える様になった。又、家族のありがたみを震災で身にしみて感じた。特に身重だったので」(西/西 2/12)。「生命の貴さ。お金、物、知識が大切なのではなく自分が生きのびていく為の知恵が必要なんだなあと痛感！ 今でもあまりにも夕焼けがきれいだと、地震が起こるのでは？と不安になる。震災前日に見た、ポーアイからの夕焼けがやけに鮮明できれいだったので - - 」(西/西 2/13)。

「自由に電気・水・ガスが使える生活があたりまえの毎日が、震災で一転した時、3つのありがたみをつくづく感じました。今また、あたりまえの生活に慣れた毎日を過ごしていて、あの当時の事を思いだし、身がひきしまる思いです。天災の恐ろしさと復興に努力した人々の苦勞・ボランティア活動の活躍に、人間とは、すごい力を持っているなと思いました。ただ、震災で亡くなられた方、特に火災が発生し、逃げられずに焼死された人を、及び、残された家族の事を思うと胸が痛みます」(西/西 2/22)。「平成6年末より平成7年三月の出産予定日までの長期入院(双胎児の為)となり、病院で震災を体験致しました。主人(大阪勤務)長男(当時年長)は大阪の実家でお世話になっておりました。幸い我が町西区はほとんど大きな被害もなく家も病院(西神戸医療センター)は無事でしたが、震災後大阪から10時間程車でかかる様になり、入院中(洗濯物の交換、必要品など)不自由になり精神的にも落ち込みましたが、同室で入院していた他の双胎児妊婦(4人部屋のうち3組が同様でした)さんとはげまし合って乗り越え、現在でも、深い絆で結ばれております。私たちは「戦友だね」って今でも当時の事を話していま

す。間もなく平成15年、そして8周年。そして我が子供達も8歳を迎え、これからも阪神大震災と共に年を重ねて行きます。同時に震災を知らない娘達に語り継いでいきたいと思っています」(西/大阪市東淀川区 3/1)。「被害が少ない町でしたが、震災直後はスーパーに行列ができ買い占める(一部の人)という悲しい姿を目にしました。身重の私はスーパーに並ぶことも、給水車に並ぶことも出来ず、”何とかなるさ”。被災した方々の事を思えばと過ぎました。幸い西区だったので、食料とかは田舎から宅配便で送ってもらえましたし、被災した産婦人科も出産までには間に合いましたが、復興住宅が出来て、町が今まで見なかった風景が出てきました。スーパーのイスでおしゃべりして過ごすお年寄、仮設からこちらに越してきてイジメや自殺をする子供たち、一番苦しい時を乗り越えられたはずなのに――とつらくなります。この町に震災前から住む子供たちは本当の苦しみを知りませんし、経験していないことを同じように感じる事は難しい。その中で自分の子供に何を教えてあげるか？ 大きな課題となっています。日々の生活に追われ、とても難しい課題です。震災の年に生まれた子は、今でも大きな音と暗い場所が苦手です。私のお腹の中で大あばれし、地震直後に逆子が戻りました(逆戻りですが)。でも音の苦手な原因を本人は理解できていないのです。年月で治っていくのかどうか、親としては少し不安です」(西/西 3/2)。「良かったことは、産婦人科の先生に逆子だから体操する様に言われていて、努力はしていてもなかなか治らなかったのに、この事が原因で逆子が治りました。私達には良い結果となりましたが、もしかしたら悪い結果になっていたかも知れないと思うと、この時の妊婦さんには何らかの影響が

あったと思います」(尼崎/尼崎 3/3)。「身重で眠れない日が何日も続いた事を思い出すと、”ゾォ”とします(1人なら走ったりにげたりどうにでもできるが、当時8ヶ月だったので、動きが自由にとれず、よけいに不安だった)。無事に生まれてきてくれた、わが子に感謝します。今では、貴重な体験をしたと思い、日ごろの教くんになったと思います」(川西/川西 3/4)。「本当に必要な物しか持たない、買わない。あると便利な物は必要な物とは思わなくなった。少しの故障なら使えるまで使う。物を使い廻しする。貧しさになれました」(北/北 3/10)。「悪かったことは特にありませんが、震災直後、家のへいが全壊したが、自分たちで(業者に)したので、すごくたかくついた。あとで、市が無償でしてくれることをきいてがっかりした。良かったことは、親を含め、協力し合う気持ちが強くなり、嫁姑の仲もとても良くすすることができるようになった(実家が関東だったので、出産に戻ることができず、すべて義母にお世話になった。義母もほんとうによくめんどうをみてくれた)」(西/西 3/15)。

「他地域の震災害がまったくの他人事ではなくなった。1.17 前後は、救急車の音や救急病院の前を通る時に涙が出そうになる」(川西/川西 3/18)。「震災により神戸の企業も神戸市(役所)も経済的にダメージがひどく、重ねて不況になってしまい、神戸市全体に元気がない。生きていくことに精一杯で、心に余裕がない。が、お金があるから必ずしも幸せであるということもないので(生活費がないと本当に困りますが――)人生には、いい時も悪い時もあって、家族みんなで助け合うことの大切さを子供に教えていきたいし、家族でよく話をするようにして、今の家族の状況を脱したい」(北/北 4/1)。「震災

のため、家のあちこちの部分にひびがいて、トイレもこわれた。トイレは直したけど、その他の部分は経済的に大変なので、なかなかおせないまま今もそのまま住んでいるけど、次同じ地震がくると、きっと、全壊しちゃうと思うので、毎日毎日とてもこわい。常に地震が頭にある」(明石/明石 4/2)。「もしかしたらこのまま死ぬかもしれないと思う体験を妊婦の時にしたということは、自分自身にとって忘れることのできない大きなものを残していると思う。水もガスもない時、妊婦では何も役に立てなかった等々つらい、くやしい思いもしたが、反面、おなかの子ともども命を再び与えられたという気持ちももっている」(明石/西 4/6)。「何年か先に起こるとされる南海地震の事が心配です。震災や災害は突然やってくるので、家庭の中でできる準備をしておきたい。もっと地震予知の研究が進んでほしいと思います」(三原/三原 4/7)。「今でも震度3～2の地震があると、1/17朝のゆれの恐怖を思い出します。主にどのような恐怖かということ、妊娠8カ月だったのですが、妊婦の自分がうえの4才と1才の子供達をどのようにかかえ守り、避難しようかと思ったり考えたりしていたことです。自分の身体が思うように無理できない状況での災害にどのようにとっさに動けるか、今でもあの時の思いは忘れられません。そして地震以降出産日までは胎動も多く、腹緊も頻回にあり、不安多い毎日で過ごしていました」(北/北 4/7)。「家族のぬくもり、人の優しさを感じた。又、災害から遠い人々(大阪など)の無関心さを実感した。子供たちには一番大切なのは優しさだと教えるようになった」(北/北 4/7)。「今年になってようやく震災を体験した子どもたちの作文が書かれた本を読むことが出来ました。私自身は直接的

な被害を受けていませんが、みなさんの傷を思うと、つらすぎて読めませんでした。一人一人の声を聞くことは本当に大切だと思います。決して忘れない為に、どんな形でもいいから、一人一人の生の声を残して行って欲しいと思います。震災を体験した妊婦の方々の生の体験談を活字で残していただけたら、より多くの理解と今後の新たな対策が見えると思います。何も力になれなくて申しわけないと思います」(北/北 4/7)。「震災後、とにかく少しのゆれでもビクビクして、家の中がゆれている様で、回りの人に、すぐ「地震? 地震?」と聞いていました。H7(地震後～)H11頃まで、少しウツみたいになってて――病院にも通いました。近頃少しずつですが、体の調子が良くなった来ましたが――」(伊丹/伊丹 4/11)。「子供に(長男)震災の時の事を話すると、結構興味を持って聞いてきます。私自身は7年もたっているのに、まだ内面的なものが、まだ十分に消化出来ない様で、その頃の事を思い出したら、TVなどで映ぞうを見ると涙が出て来てダメですね。心の傷がいていない感じです」(尼崎/尼崎 4/13)。「TVなどで、非常事態に備えて色々の特集などやっているが、いざとなると本当に何も出来ないと思います。震災時、妊娠7ヶ月でお風呂に入れなかったのが辛かったです。4日目にやっと主人の実家に入る事が出来たのですが、水、ガス、電気があたり前だったのがこんなにも大事なものなんだと涙が出る程うれしかったのを今でも覚えています」(垂水/加古郡 4/14)。「幸いに被害の少ない地域に住んでいたが、7ヶ月のお腹で1時間も銭湯の外で待つのはつらかった。周りの妊婦さんは実家に身を寄せた人が多かったみたいだが、神戸から移動しなかったのは、地震なんかに負けたくないという気持

ちと、夫を信頼していたから。自分達とは比べものにならない位、つらい立場の人の事を考えると、自分達のおかれている状況で、弱音(よわね)をはくなんて出来ませんでした。でも、さ

#### 4. 無地区の妊産婦

「夫が、職域からのボランティアに参加したが、ボランティアにかかわるきっかけになり、貴重な体験だったと言っている。産後の私は自宅で夫の身を案じて待つしかなかったが、家族の大切さを改めて感じた日々だった」(加古川市/加古川市 1/17)。「震災直後、数多く余震があり、その度に生まれた直後の赤ちゃんを、どうやって避難させようか - - そればかり考えていた。厳寒の中、新生児をいかに守って行くか - - 。自分の産後の身体の事よりも、そればかり考え、かなりのストレスをかかえた」(氷上郡/氷上郡 1/17)。「生まれた日が震災当日だったので、1才、2才の誕生日などは追悼の日として一日中ニュースが流れ、亡くなった人、被災された人などの気持ちを考えると、はしゃぐのも悪い気がして、誕生日が一日でも違っていたらと思うこともありました。それから全く被害はなく被災なしに近いので多くの人ボランティアなどとして活躍されましたが、出産したことで何も出来なかったことも自分自身の気持ちとして残念な所もありました。げんざいは当日が誕生日だということも苦ではなくなり、誕生日ということと震災の日ということをそれぞれに大事にしたいと思っています」(神崎郡/神崎郡 1/17)。「1月20日の夜中に異変のため病院に連絡し行こうとしたが、タクシーがつかまらず(れんらくもとれない状況)、おなかがはり、はすいていたがタオルを車にひいて、自分で運転して病院まで行った。里帰り出産で主人も

すがに震災の記憶も鮮明な頃にサリン事件が起きて、ニュースがオウム関連の物にとってかわられると、腹立たしさと、未来に対する不安を感じてしまいました」(垂水/垂水 4/14)。

いなく、運転するのが私しかなくて困った。震災直後だったので、タクシー会社もパニックだったと思うけど、初めての出産だったので、運転がこわかって足がガクガクしながら運転したことは忘れられない」(姫路市/赤穂市 1/21)。「生活に変化は特になかったが、友人が神戸で頑張っている姿に感動した。当時は出産で連絡もとっていなかった」(揖保郡/揖保郡 1/22)。「震災から8日目に出産したけど、とても不安だったし、余震で病院の部屋のテレビが落ちそうになったりして怖かった。バイパス近くのハイツなので、トラックが通ただけで家がゆれたりして、また地震かと思はらくはおちつかなかった。子供も生後2か月でその時は、毎日不安でした。今はもう7才になり、あまり気にならなくなった」(加古川市/加古川市 1/25)。「身近であんな大きな地震があり、自分達は被害がなかったのですが、なんだかこわくて、あらためて地震の事について深く考えさせられました。子供の出産は震災の後だったのですが、もし、こっちの方だったら、本当どうだったかなと思うと、子供を出産された方は、ものすごく大変だっただろうなと思いました。子育てどころじゃないですからね。子供達を見れば2度とあんな災害は起こらないで欲しいです」(揖保郡/揖保郡 1/27)。「何を備えていても、どんな心の準備をしても、この寒空にあのような事態が起こってしまうと、家族を守りきれないと考える時、とても自信がありません。でも、

あきらめないこと、これは、いつも心しておこうと思っています」(篠山市/篠山市 1/28)。

「わたくしたちガスが来なくてお風呂に入れなかった。上の子が風邪をひいていて、病院へ行けずに困った -- とそれ位で、住まいもマンションなので多少ひび割れなどがあったものの以前同様に生活できています。ほんとにこんな小難ですみ、よかったと思っています。当時、親をなくされた子供さんたちのことをよくテレビで見ていたので、住まいに、また経済的に余裕があれば、一緒に生活してあげられるのにねと主人とよく話していました。ほんとに子供達がかわいそうだった思いがあります。親ならみなさん、そう思われたと思いますが -- 」(川辺郡/川辺郡 1/29)。「不況に震災がかさなって主人の会社は倒産するし、友人と事業を始めたが、さらなる不況で、私もパートに出ないとやっていけない始末。子供にもなにかと寂しい思いをさせて悩んでいます。もう一最悪です」(小野市/小野市 1/30)。「震災時、病院にてちょうど点滴中でした。前夜から具合が悪くなり一睡も出来ないまま、明け方ゴーという地響きとともにゆれたので、点滴台をおさえるのが精一杯でした。同じ病院の人は私以外 “家のある人は帰りなさい” というので、みな退院していきました(神戸から被害者が運ばれてくる為)。一步も動けないままの状態です。TVの画面からは震災と火災の映像ばかりで、とても胎教によいとはいえませんでした。今となれば、この年に生まれた子の成長を見るにつけ、忘れることは出来ません。ずっと、語り続けていかなければと思います」(加古郡/加古郡 1/31)。「子供がおなかにいる時、震災を体験し、祖父母の家は全壊。おじは家の下敷きとなって亡くなるという事がありました。今、子供は7才なのですが、少し

こわがりな所があります。(車をこわがったり、夜は手を絶対につないでくるなど -- )これも、私の精神的な物が、影響しているのかなど、ふと考える事があります」(姫路市/姫路市 2/1)。「小さな命がたくさん消えて、その子たちの「命」を我が息子にもらったように思え、大切にそだてていきたいと思っています。息子の成長と同時に、震災の事も私の頭の中にはあります。住んでる町は被害はなかったのですが、大きなゆれを感じ、こわかったです。他人事ではないので、子供達の心のケアを願っています。「もう8年」ではないと思っています」(朝来郡/朝来郡 2/3)。「家族(お互いの両親・兄弟)の団結が、今まで以上に強くなったと思う。被災した私の母や兄弟が子供をつれてしばらく私の家に来ていたが主人や主人の母は本当によくしてくれた。狭い部屋にギュギュだったので、私自身主人達に気を使い、ストレスがたまった時もあった」(加古郡/加古郡 2/9)。「山崎断層が近くにあるので、とても恐れています。防災に気をつけたいと思っています。(1.17)あれからとても意識するようになりました。家族のこととか遠い所にいる身内の人とか少しでも(どこかで)地震があれば心配になります」(宍粟郡/宍粟郡 2/9)。「当時、高砂市内の実家に居り、現在の住居(県住5階建の5階)は誰も居なかったのですが、後で戻ってみると、食器棚、家具の上から等、物が散乱しており、もし震災の時、ここに居たら、ケガどころではと考えるとすごく不安になりました。当時の事を、現在7才の息子にも毎年(わかるようになってから)の様に話しています」(高砂市/高砂市 2/12)。「直接大きな被害は受けてはいませんが、神戸という身近な土地でのあの出来事はとてもショックでした。子どもの誕生日とも近く、子どもの成長する年数と

震災の記憶とが、いつも一緒に印象が結びついている感じです。あの時は自分が出産のため、身動きがとれず、皆が大変な時に何も役に立てなかったと思い、世界で起きているいろいろな救援に少しでも役立てるよう何かしたいと思って今すごしています」(姫路市/姫路市 2/16)。

「神戸の叔母の家で、災害に会われた方を親切に受け入れたところ、その方たちに家の中をかき乱されて、たいへんだった事を思い出します。私自身、大きなお腹のため動けず、主人に神戸の姉のところを物資を運んでもらったりと、何度も神戸に足を運んでもらいました。今では震災のことなど、みんな口にみません」(赤穂郡/赤穂郡 2/27)。「警察官の主人の仕事が、震災の応援の方へと多忙になり、入院中の私にも色々苦勞がありました。上の子供達とも、学校でこの話はよくしています。直接ではありませんが、思いはあります」(揖保郡/揖保郡 2/27)。「子供達に災害時の集合場所等を教えている。親戚が震災にあった為、親が必死になっていた姿を見て、助け合いの大切さを痛感した。次は我が身 -- と頭の片隅において生活している」(飾磨郡/飾磨郡 3/5)。「あまり影響のない地域だったので、備えておかなければ、と思いつつ何もしていないのが現状です。でも地域での防災イベントや防災センターなどに見学したり、参加したりと、親子で学習しておこうとはしています」(佐用郡/佐用郡 3/5)。「宝塚の病院に勤務していたが、災害時、ちょうど妊娠9ヶ月で、ギリギリ働こうと思っていたのが、電車がとても妊婦が乗れるような混み方でなくなり、産休より少し前から休みに入らざるをえなかった。その為、産後早くから復帰しないといけなくなり、身体がつかったし、災害直後の、すごく忙しい病院を手伝えなかったことも、同僚

たちに悪かったなと思っています」(三田市/三田市 3/6)。「今年の夏休みに、子供会の旅行で神戸の防災センターへ行きましたが、最初の震災時の建て物が崩壊する映像は、音の大きさもそうですが、“その時”のことを思い出すようで、下の子供(当時5才)が音におびえたのを理由に外へ出ました。お腹に1人目の子がいた上に、となりの部屋に義父母がいたとはいえ、主人が不在でしたので、あの揺れやはじまりの音を思い出してしまい、映像をみるのはつらいし、いやです。あれから現在まで、そしてこれからも主人は泊まり勤務の仕事をしておりますので、「もしも、あったら -- 」という心細さは消えることはないと思います」(西脇市/西脇市 3/10)。

「あんなに大きな地震がくるとは、まったくと言っていい程思っていませんでした。よく、地震が来たら、“机の下にかくれる”と言いますが、私はちょうどベッドで寝ていたところで、動くことすら出来ませんでした。ただ、隣の主人をおこし、しがみついているだけでした」(加古川市/加古川市 3/20)。「震災の時、まだ子どもはおなかの中でしたが、あの時、寝ていたはずの主人が、おなかの子どもと私の上になって反射的にかばってくれたことを、一生わすれないと思います(ふだんはぶっきらぼうで、愛情がわりにくいので)」(高砂市/高砂市 3/24)

「震災時、ハイツの2Fに住んでいました。食器が落ちて割れるなど、大変でした。上の子(当時2才)がテレビで震災のニュースをくり返し見て絵を書く時に、「地震ガチャンガチャン、かじボーボー」と言って、赤い炎と建物のこわれた様子を書いていたので、子供の心に傷があるのかと心配になりました」(姫路市/姫路市 3/26)。「震災直後は夫の仕事が港湾土木だった

ので、大変忙しかった様ですが、最近は仕事もめっきり減って、会社の状態も悪くなり失業中です」(姫路市/姫路市 3/27)。「たくさんの方々が大変な思いをされたなかで、私の小事を書くのは申し分けないように思いますが、被災した親族が約1ヶ月同居していたため、私は妊娠8～9ヶ月だったので、精神的・肉体的、又、経済的(食費・光熱費等が倍だったので)にきつかったなあと思い出しています。そして、妊娠前にボランティア活動をしていたのですが(肉体的にハードな)、それができないのが、はがゆく思いました。結果的にみれば、お金で募金というかたちでしか、思いを表現できませんで

## 5. 意見分布

以上には問30の回答欄に記入された意見などを紹介した。人数が多いだけに相反する意見や感想もあるが、そのいずれもがそれぞれ率直な気持のあらわれであると思う。この大震災を体験した妊産婦 373人の発言を、震災から3年後に当学会が編集した文集「母と子」を読み返すと、震災当初に妊産婦が困惑した避難所生活、ライフラインの寸断による生活の破綻、医療機関が破壊されたため、やむなく定期受診や出産できる場所を探し歩いた不安と苦勞、地震の起きた日に出産を迎えた産婦の恐怖などが生々しく綴られている。本調査に答えた上記の回答にも、これらのつらい思い出が色濃く残っているが、その反面、震災後8年を経過した時点で、震災当時や大災害一般を冷静に見つめた意見も寄せられており、それぞれが第4章までの記録のように震災を数字化した報告とは異なる震災

した」(龍野市/龍野市 3/28)。「被害のなかった地域に住んでいたといえ、同じ時に不安をかかえて出産育児をされてきた親の精神状態を考えると、いたたまれない。現在忘れかけ安定な精神状態であっても、同地域に地震(例え軽いものであっても)が起きた時に、思い出され、必要以上に不安になってしまわれるのではないかと思う。ケアが必要ではなからうか」(豊岡市/豊岡市 3/30)。「幸い、この町は、ほとんど影響はなく、テレビ、新聞等で見るとかきりで、あまり身近なこととも思えず(しょうじきなところ)にあります。これを機会に、考えをあらためていきたいと思います」(佐用郡/佐用郡 4/8)。

の実情を描いており、今後に予想される大災害に備えて広く国民の皆様にご読まれ、参考になるよう願うものである。

前項までは問30の回答欄になんらかの意見などを記入された 213人のうちから95人の記述を紹介したが、この選択は編集者の一存で決めたものであり、採録しなかった中にも貴重な体験や見解の記されたものが少なくなかった。回答をいただいた方がたの半数以上について、そのご寄稿の紹介を省略した責を塞ぐことにはならないが、省略させていただいた方がたも含め、問30に回答された意見など、全員 213人の記述内容を細分化したのち集計した結果を表V-9に掲げて、お詫びの微意をあらわすとともに、わずらわしいアンケートにご協力賜った皆様へ再度感謝の気持をお伝えしたいと思う。

表V-9 記述内容の項目別一覧表

地区名 記入者数	激 17	強 44	弱 79	無 73	計 213
阪神(関西)で地震に遭うとは思わなかった	1	1	2	3	7
近所で(大勢の)人が地震で亡くなった	1	1			2
知人が亡くなった			1		1
親族が家の下敷きになって死亡した				1	1
生きているまま焼け死んだ人の話を聞き、すごくショックだった		1			1
人間は簡単に死んでしまうものだと感じた		1			1
(震源地に近かったが)大きな被害がなく命があったのは幸運だ		1	1		2
被害がほとんどなかった・被害の少ない地域にいてよかった			2	13	15
避難所へ行っていたら、だいへんだっただろうと思う		1			1
ライフラインの途絶に困った。ライフラインの必要性・ありがたさを痛感	5	5	9		19
断水に困った	1	2	1		4
妊娠9か月で給水車待ちの行列に並び腰痛を起こした		1			1
食器の後片付け、洗濯などで節水を心がけた			1		1
入浴ができないので困った	1	1	1	1	4
妊娠7か月で銭湯の行列1時間待ちはつらかった			1		1
交通渋滞・交通マヒ・タクシーが使えないのに困った	1	1	2	2	6
食料不足に困った	1				1
健康で元気な人と違い、妊婦・子ども・病人は寒さと不潔に困り果てていた			1		1
援助(物資)をありがたく思った	1	2			3
限りある資源・ふだん使っている物の大切さ・ありがたさがわかった	1	2	2	2	7
子供に物の大切さをよく教えたい・教えるようになった	1			1	2
物は少しの故障なら使えるまで使う。貧しさになれた			1		1
ほんとにしんどかった	1				1
すべてがメチャクチャだった	1				1
震災のため医療(定期健診)が受けられず(受けにくく)困った	1	2	1		4
病院の全壊と交通マヒで1か月後にやっと連絡がとれ、他院を紹介された			1		1
地震のため急に転院させられた		1	1	1	3
急に転院させられた。被災した予定病院だったら生まれていなかったかも				1	1
家の壊れなかった妊婦は退院させられた(神戸から妊婦を受け入れるため)				1	1
震災のため病院が出産に対応できないので、とりあえず実家に戻った			1		1
里帰り出産の予定だったが、実家が震災を受けたのでできなかった				2	2
出産のため実家へ帰っていたら、ケガではすまなかったと思う			1		1
地震に負けたくないという気持ちがあったから、神戸にとどまった			1		1
一時は胎内の子が全く動かなくなった		1			1
(逆子のため医師から運動を勧められていたが)、震災を機に逆子が治った			2		2
タクシーが使えず、破水していたので、自分で車を運転して病院へ行った				1	1
病院が保証人なしで被災妊婦を受け入れてくれた		1			1
地震発生日に生まれた赤ちゃんをどのように守るかばかりを考えていた				1	1
地震発生日の出産なので、誕生日もはしゃぐことができない				1	1
点滴中に地震が起き、点滴台をおさえるのが精一杯だった				1	1
地震発生時は分娩台の上において死の恐怖を感じ、混乱のすべてを体験した	1				1
生まれた時は水もなく、消毒液でふかされただけだった	1				1
出産にはお湯が使えなかった	1			1	2
出産のための入院中、余震などでとても不安だった				2	2

地 区 名	激	強	弱	無	計
病院で震災を体験し、同室だった他の妊婦と今も強い絆で結ばれている			1		1
妊娠前より10kgもやせた			1		1
無事出産できたことは嬉しくありがたいと思っている		1	2	2	5
3月に生まれた赤ちゃんが皆に希望と喜びを与えてくれた			1		1
小さな命がたくさん消え、その子たちの「命」をもらったと思う			1	1	2
おなかの子ともども命を再び与えられたと思った			1		1
出産が震災直後の混乱期でなくてよかった		1		2	3
激震地で出産した人たちはたいへんだったと思う				2	2
私はよかったが、震災が妊婦に何らかの影響を与えているのでは			1		1
次の出産でもまたこわいことが起きるのではなど不安で、中絶した		1			1
当時は育児に自信がもてなかった。もう一人生んでおけば - - と今は思う			1		1
震災の混乱で入院できなかつたため、妊婦が死亡したと聞いた			1		1
被害の大きさに驚いた・地震のこわさを知った・地震の恐怖感が続いている	2	2	13	7	24
少しの揺れにもビクビクする・動悸が高まる・震災当時を思い出す		2	7		9
音に敏感になっている		1			1
震災後、サイレンの音、ヘリコプターの音等がとてつもない。思い出したくない			1		1
震災日の夕焼けがやけに鮮明だった。今もきれいな夕焼けに地震の不安が			1		1
1・17前後は救急車の音や救急病院の前を通る時に涙がでそうになる			1		1
震災をTVなどで映像でみると、涙が出てきてダメですね			1		1
震災の犠牲者・家族を思い、胸が痛む			2	1	3
自分がうつ状態・自律神経失調症・心配性などになった	1	3	2	2	8
心の傷をどうしたらよいか・心のケアが必要である		1	1	2	4
やっと子供達の震災体験記を読める気持ちになった				1	1
親が必死になっていた姿を見て、次は自分だと思い生活している				1	1
家族の協力が(家族と一緒にいられて)よかった・きずなが強くなった	2	3	10	2	17
家族・親族のきずなのたいせつさ・ありがたさを知った	1	3	1	5	10
ガスや水を使えない地域と使える地域から親類が往来し、交流が深まった			1		1
家族そろって健康なのを幸せに思う			2	1	3
ストレスがたまり家族間でトラブルが起きた(今もイヤミを言うことがある)	3	1			4
避難してきた親類などに困惑した	1		1	3	5
震災発生時に夫がおおいかぶさって、かばってくれた				2	2
地震の起きた時には夫にしがみついているだけでした				1	1
早朝のため夫がいてくれてよかった		1	1		2
夫が職務上の理由などで忙しく、家族の世話ができなかった	2	1	1	3	7
交通マヒで夫が帰宅できず、赤ちゃんと2人きりの生活で強くなったと思う			1		1
夫が道なき道をたどって長田の義姉宅へ行き、甥や姪を連れてきた			1		1
余裕があれば、親の亡くなった子と一緒に生活してあげるのにと夫と話した				1	1
震災は夫がボランティア活動するきっかけとなった				1	1
夫が転職せざるを得なくなった		1			1
夫が精神的にダメージを受けた				1	1
悪条件が重なって、3年前に夫は死亡した		1			1
こどもが健康に育っているので嬉しい		4	2		6
こどものたくましが嬉しい	1				1
こどもに健康上の不安(問題)がある	1	1			2

地 区 名	激	強	弱	無	計
こどもが情緒不安定になった・大きな音や暗い所が苦手	1	1	2	2	6
子どもを守りきれない自信がない				1	1
子どものことが一番心配です				1	1
年長の子どもの世話がたいへん（かぼうのがやっと）だった	1		1	1	3
年長の子どもにあの恐怖の体験がどのように残っているか不安			1	2	3
年長の子は震災後1週間声がかすれ、地震のことにふれたがらない		1			1
出産と重なり、上の子どもに不安を与えたことはかわいそうではない			1		1
わが子と同じクラスに問題行動のあるお子さんを見て、考えさせられる		1			1
育児の悩みを仲間から聞かされた		1			1
震災や不況が一番弱い立場の子どもに苦痛を与えていると思う				1	1
人のぬくもり・優しさを感じた	1	4	3	1	9
まわりの人(家族・親類・隣人・入院先の関係者・その他)がよく助けてくれた		3	1		4
近所づきあいの大切さを知った・大切にしている	1	3	5	2	11
遠隔地の親戚・知人のことを心配するようになった				1	1
勤務先の病院が被災したが、出産のため仕事が手伝えず同僚に悪いと思った				1	1
出産のため(ボランティア)活動ができず残念だった			1	3	4
困っている人達に何かしなくてはという意識があって動くことができた				1	1
友人が神戸で頑張っている姿に感動した				1	1
今後は困った人を助けようと思う・被災地への募金に応えるようになった				3	3
他地域の震・災害がまったくの他人事でなくなった			1	1	2
震災経験者なのに、遠い外国の災害を身近に感じにくい自分は薄情かと思う	1				1
災害から遠い人(大阪など)の無関心さを実感した			1		1
地震に便乗するような人・利己的な行動をする人がいた	1		2	1	4
善くも悪くも人は外見で判断できないなど、心の勉強になった	1				1
周囲の家の解体作業による騒音・ほこりで家族が眠れなかった		1			1
家の修理が半年ほど続いたたいへんだった			1		1
住宅の補修にかなりの出費があった		2			2
トイレだけは修理。あちこちのひび割れなどは家計が窮屈なためそのまま			1		1
全壊した家の塀の修理がすごく高くついた			1		1
マンション購入直後の震災で資産価値が大幅に下がり、修繕費も高かった	1	1			2
マンションは補修か再建かでトラブルがおきやすい。一戸建に住みたい	1				1
この震災で家をたてる夢が遠くなった			1		1
当時は気力がないままに暮らした・脱力感におそわれた		1	1		2
食事を1~2度とれないだけで不安と体力のなさを実感した		1			1
復興途上、生活のおくれにイライラするときもあった。つらい時間が長かった			1		1
現在の生活・人の営みのはかなさを知った	1		2	1	4
自分がいつ死ぬかもしれないという現実もよく考えるようになった			1		1
死ぬかもしれないと思う体験を妊婦のときにしたのは貴重だ			1		1
まずは水の確保。命があり、家が大丈夫ならあとはなんとかできる	1				1
命さえあれば、どんな苦しいこともいつか乗り越えられると実感している	1				1
生きのびていくための知恵が必要だと痛感した			2	2	4
人として最低何が必要か・本当に必要なものは何かを学んだ気がする	1			1	2
生きていてよかったと実感している	1				1
命の大切さ・尊さを感じた	4	4	3		11
大災害への対応には自信がないが、あきらめないことをいつも心しておこう				1	1

地 区 名	激	強	弱	無	計
これからの人生も長く、つらい事や悲しい事も人生のうち。がんばらないと				1	1
自分たちよりつらい立場の人のことを思った・思ってがんばった			4		4
自分はまだ幸せだとTVを見て実感した			1		1
当時のことを思い出して、身の引きしまる思いです			1		1
今の生活の大切さ・かけがえのなさを知った・日々感謝して暮らしている	1	2	4	3	10
震災の体験が子どもを守らねばという心を育ててくれたように思う			1		1
子どもの前では笑顔を保てるよう精神力を鍛えてゆきたい		1			1
貴重な体験をしたと思う		1	1	1	3
考えさせられることが多かった			2	1	3
地震を身近なものとして考えるようになった				1	1
地震・不況・倒産・失業 -- つらい。今、最悪です	1			3	4
生きていくのに精一杯で心に余裕がない			1		1
あの地震さえなかったらと思わずにはいられない		1			1
災害はある日突然やってくると実感した				1	1
災害は思わぬ時に起こり、また忘れ去られやすい			1	1	2
「のどもとすぎれば」というのが実情・今はもう忘れかけている	1		1	1	3
いまだに本当の再建はできていないと思う		1			1
「もう8年」ではない				1	1
個人では何もできないことに気づいた。行政が加わらなければ			1		1
被災者に国から援助があるべきだ		1			1
援助や支援に甘えるだけでなく、自立の姿勢が必要だと思う			1		1
復興・人々の苦勞・ボランティアの活動、人間はすごい力をもっている			2	2	4
世の終わりかと思った当時に比べ、人や社会の立ち直りに感心している		1	1		2
防災の日を体験に基づいたものになければ意味が少ない		1			1
日頃の訓練と違い、経験者でないと対応の仕方がわからないと思う			1		1
大規模地震がまた来たら同じ状態がくりかえされるのではないかと思う	1		1		2
防災イベントへの参加、防災センターの見学など親子で学習したい				1	1
防災センターを見て当時はよみがえり、落ち着かない気分だった			1		1
防災センターの見学でつらい思いをした。もう見たくない。				1	1
災害に常に備えて（話し合っ）おくことが必要である		1	7	4	12
地震のことを話している・語り続けなければ・忘れてはならないことだ		2	6	16	24
地震のことは話題にしたくない			1	1	2
山崎断層が近くにあるので心配				2	2
何年か先に起こるとされる南海地震が心配			1		1
震災のあとマスコミはオウムのことばかりだった・サリン事件が腹立たしい			1	2	3
このアンケートに感謝している	1	2	1		4
該 当 項 目 を 記 述 し た 延 べ 人 数 の 合 計	41	100	171	149	461

注. 1人で複数項目を記述したものがあるので、表の最上部に掲げた「記入者数」は表の最下部に示す「該当項目を記述した延べ人数の合計」とは一致しない。

## VI. ま と め

阪神・淡路大震災の起きた1995年のはじめの3か月間に出産した妊産婦から寄せられたアンケート調査の結果を、8年後に実施した今回の調査結果と比較した。この震災による被害程度に応じて兵庫県を激・強・軽・無の4地区に分け、各地区間の相違の有無についても検討した。

### 1. 地震のさいに回答者が居住していた地区と回答率

地震のさいに回答者が居住していた地区が前回調査とほぼ一致するように配慮した。すなわち、激地区には6.5%、強地区に約18%、軽・無地区の居住者がそれぞれ全体の1/3強である。

本調査は地震から8年経過した後の追跡調査であるため、ほぼ半数の47%が転居先不明であり、この率は被害の大きい地区ほど高かった。アンケート用紙を受け取ったものの回答率は46%で、この率は激地区で他の3地区のいずれと比べても有意に高率であった。

### 2. 地震による家屋損壊と健康、就業、家計への影響

#### a. 家屋の損壊

激地区では回答者の2割近くが家屋の全焼や全壊に見舞われ、半壊・半焼を加えると4割前後に及び、家屋の被害を免れたものは1割余に過ぎない。強地区でも全壊または半壊が1/4を占め、軽地区でも2/3ほどが家屋の被害を蒙っている。便宜的に無地区と分類した地域でも1割余は家屋の一部破損を受け、例外的少数ながら全壊・半壊した家屋もある。

#### b. 住居の移転

地震後の転居も被災の程度に対応して激地区

では回答者の3人に2人が転居、しかもその8割は2回以上転居しており、3回以上の転居も激・強地区では3割を超えている。転居理由を震災のためと答えたものは、激・強・弱・無地区でそれぞれ58、28、9、0%と被災の程度に併行している。軽地区でも1/3が転居し、そのうち1/3は多少とも震災の影響による転居である。また、地震時の居住地区と現住地区が同じである率は、激・強・弱・無地区でそれぞれ77、89、93、97%であった。具体的転居先として、激・強地区では避難所暮らしを体験したのも稀でなく、どの地区でも一時的転居先は親戚・知人の家が最も多いが、現在もこれらに残ったままのものも各地区でみられる。

#### c. 地震による妊産婦の健康と就業の変化

自己の健康が地震前と比べて変わったと思うものは1割で、震災時の恐怖に関連した神経症的訴えが多数を占め、それ以外では更年期障害、いわゆる生活習慣病、アレルギー性疾患、婦人科系の疾患などもある。なお、地区間には有意差を認めなかった。

就職状況が変化したものは回答者全体の中では少数派であり、「失業中」は前回調査と有意差はないが、「休業中」は前回調査より有意に減り「転職」は増加している。就職関係が変化した原因は家庭の事情が29%、出産・育児が27%、その他が20%、不況が18%であるのに対して地震は6%に過ぎず、地区間に有意差は認められない。

#### d. 地震による配偶者の健康と就業の変化

地震前と比べ健康の面で変わった配偶者は1割に満たなかったが、強地区では13%で無地区より有意に多かった。その内容は妊産婦の場合

とは異なって精神面の不調は少なく、アレルギー疾患・慢性疲労・肝臓病・腰痛などが比較的多く訴えられている。

激地区では配偶者の就業率が強・弱・無の3地区を併合した率に比べて有意に低い。就職状況が変わった原因は1位が「不況」ではほぼ半数を占め、2位の「その他」と3位の「地震」がほぼ2割、「家庭の事情」が1割で、妊産婦の場合と同様、地区間には有意差を認めない。

#### e. 家計への影響

地震の前と現在とで、仕事や住居・経済状態などの暮らしむきを総合的に比べると全地区合計で「非常に苦しくなった」、「かなり苦しくなった」、「少し苦しくなった」がいずれも前回調査と比べてそれぞれ3、8、9%増え、全般的に悪化の傾向が認められる。その原因は不況58%、家庭の事情21%、地震13%、その他8%の順で、妊産婦およびその配偶者の就職状況の場合と同様に地震よりも不況の影響が大きい。これは神戸市が2003年に行った調査の結果とも大筋で近似している。

### 3. 地震(1995年)後3か月までの期間に生まれた児の発育など

初めての出産は全体の46%、2人目37%、3人目以上17%であった。妊娠期間は $38.6 \pm 2.3$ 週と正期産の期間を示し、経膈の自然分娩が79%、吸引・鉗子分娩が7%、帝王切開が13%で地区間に有意差はなかった。男女の出生数はほぼ同数で、出生時体重には震災の影響をうかがわせるような地区間の有意差は認めなかった。

1歳6か月と3歳の健康審査で指導や注意を受けたのはいずれも8%、就学前では4%で、身体的発育や精神・知能面での発達遅延に関する例が多い。3歳児と就学时健康審査では激地

区で指導・注意を受けた率が高いが、震災に関連した結果か否かは判断としない。

こどもの発育や健康状態に対する母親の評価には地区間の有意差がなかった。健康について気になる事項は、アトピー・喘息が多く、低身長と肥満がこれに続いている。

### 4. 年少児(地震年度出生児の次に生まれた児)の発育など

地震年('95)以後の妊娠と出産の回数は被災地区(激、強、弱を合わせた3地区)で無地区より有意に低い。これは前者が都市部という地域性のためか震災の影響なのかは判断できない。また、地震年度の出産から年少児の出産までの期間は激地区で無地区より8か月長く、強・軽地区をもあわせて概観すると、この期間は地震による被害の大きさに平行しているようにもみえるが、標準偏差が大きいため地区間に有意差は認められない。

妊娠週数は平均して38.7週という満期産の期間に収まっており、いずれも地区間の有意差はない。早産が全出産に占める割合は全地区で7%に認められ、全国平均で早産が漸増している傾向を考慮しても大きな数値となっている。これが震災となんらかの関連をもっているか否かについては、さらに検討が必要である。

年少児が自然分娩で生まれた率は地震年出生児と比べて各地区とも有意差はない。また、年少児の出生時体重を経産による地震年度出生児のそれと比較したが男女ともに有意差なく、地区間にも有意差を認めなかった。

出産を予定していた病(医)院で出産できた率は、地震年度出生児では被災の大きかった地区ほど低く各地区間に有意差を認めたが、年少児では、この率が各地区ともずっと低下している。

総例数が少ないこともあって、地区間には有意差を認めないが、年少児についても出産施設を変更した率は被災程度と平行している。

年少児の妊娠や出産にさいして、とく困った事項としては、切迫早産・妊娠中毒症・つわりなどの産科学的障害のほか、離婚や年長児の世話など家庭上の問題も訴えられていた。また、年少児の発育や健康状態に対する母親の評価は4地区全体として、「よい」が37%、「よくない」が2%、他は「普通」で、地区間に有意差はなかった。健康などについて、とくに気になる事項としてはアレルギー性疾患、低身長・低体重、風邪をひきやすいなどが挙げられていた。

## 5. 震災の多面的回顧

震災当時の妊産婦は激～軽地区で99%以上、無地区でも90%以上がその体験をこどもたちに話しており、被害の大きかった地域の妊産婦ほど震災の夢をたびたび見ている。

被災者の受けた経済的援助は激地区でも29%、平均32万円であり、全壊した家屋や生活を立て直すための資金としてはあまりに少ない。

被災直後に感じた困難な事項の数は地区間の差が顕著で、具体的には激～弱地区で入浴不能、ガス停止、飲料水不足が上位を占めたのに対し、無地区では家族との連絡が取れなかったことが1位であった。

震災のような非常事態に備えて回答者の半数近くがなんらかの対策を講じており、「寝室にタンスなどを置かない」などの安全対策、非常袋・飲料水・インスタント食料の常備などのほか多様な回答が寄せられた。

震災などの大災害について記述された内容と震災から3年後に当学会が編集した文集の内容とを比べると、後者には震災当初に妊産婦が直

面した困惑や恐怖などが生々しく綴られている。今回の回答にも、これらのつらい思い出が色濃く残っているが、その反面、震災後8年を経過した時点で、震災当時や大災害一般を冷静に見つめた意見も寄せられていた。

以上の結果から見ると、地震が強烈であった地区ほど住居が多く破壊され、そのため転居を強いられた率が高く、地震の翌年以降に生まれた年少児でさえ崩壊した医療施設復旧の遅れを反映してか、出産予定の病・医院を変更した率が被災程度の軽い地区に比べて高かった。またこのほかにも震災の体験を綴った手記の中で、とくに激～強地区に住んでいた妊産婦からは当時のさまざまな苦勞の偲ばれる内容が寄せられている。このように被災の地区差が明らかであるにもかかわらず、地震年度の出生児と翌年以降出生の年少児について調べた本調査の項目については、地震の影響と断定できる地区差は認められなかった。当時の出生児に対して、地震による産科学上の悪影響は果たして無かったのだろうか。

前回調査では、兵庫県下の産科医を通じてアンケート用紙を妊産婦に配布・回収したため、回収率はほぼ100%であった。しかし、震災により死亡したと推計される妊産婦は21人もあった(本会刊行「大震災・母と子」に記載)。予想もしない非運に見舞われたこれらの人たちははじめ、地震によって負傷したと思われる妊産婦、さらには転居先不明でアンケート用紙が返送されたり、回答のいだけなかった方がたの少なくないことを考えると、本調査で集計されたデータが震災時の全妊産婦という統計学的母集団の実態を適正に反映しているか否かについては問題がありそうに思われ、アンケート調査の限界を感じないわけにはいかない。

震災後に再建された新しいビルや民家の立ち並ぶ中心街とは対照的に、被災の傷痕が今なお歴然と目立つ被災地で、ついのすみに手が届かないまま窮屈な同居を余儀なくされていたり、震災のため背負い込んだ多額の借財や職探しに

追われているなど、アンケートへの回答どころではない人も少なくなかったのではと懸念し、これら苦闘する親のもとに暮らす子どもたちも健やかに成長してほしいと願う心、切なるものがある。

## 付. アンケート用紙の内容

以下の4頁をA3版の用紙(薄青色)1枚に両面印刷して配布した。これを縮小複写して以下に収録した。

平成 14年 11月

阪神・淡路大震災に負けずにご出産されたお母様がたへアンケートのお願い

兵庫県産科婦人科学会

会 長 丸 尾 猛

日本産婦人科医会兵庫県支部

支部長 小国 美種

拝啓。朝夕ひときわ冷え込む候となりましたが、いかがお過ごしでしょうか。突然にお手紙を差し上げますが失礼のほどお許しください。阪神・淡路大震災(以下「震災」と略します)よりまもなく8周年を迎えようとしています。震災の混乱から間もない時期に誕生されたあなたのお子さんはすこやかに育っておられますでしょうか。また、あなたのお身体の調子はいかがでしょう。

あの年に当学会は震災が妊産婦に及ぼした影響を多面的に把握するためのアンケートを行い、あなたを含めた兵庫県下の多数の妊産婦からご回答をいただきました。お陰様でそれらをまとめて「阪神淡路大震災のストレスが妊産婦および胎児に及ぼした影響に関する疫学的調査報告書」、「その補遺」、「大震災、母と子」として刊行し、関係官庁や全国の公立図書館や医師・看護師などを養成する教育機関をはじめ 600近い図書館へ寄贈することができました。これらは当学会の調査に対する皆様方のご協力があってこそできたことであり、ここにあらためて心より御礼申し上げます。

もとより当時のアンケートの目的は震災が妊産婦と児に及ぼした短期的影響について解明することでしたが、このたび8周年を迎えるにあたって、震災が妊産婦と児に及ぼした長期的な影響についても大規模な調査を行い後世に残しておくことが、あの大災害を実体験したわれわれの務めでは無いかと考えるにいたりしました。このアンケートはその一環であります。震災によるつらい経験を重ねられた皆様の中には、思い出したくない、答えたくないというお気持ちの方がたもおおいでなるであろうと存じますが、それだけにこの調査は甚大災害時の母性保護について真剣に検討するための貴重な資料として役立つものと確信しております。

なにかとお忙しい中を繰り返しアンケートをお願いいたしまして、はなはだご迷惑とは存じますが、個人名での公表はいっさいいたしませんので、本調査の意義をご理解いただき、あなたとご家族の震災後の状態についてできるだけ正確にお教えくださるようお願い申し上げます。

敬具

- ・本アンケートは平成7年の調査時に住所と氏名を明記されてアンケートにご回答いただいた方がたの中から、一定の割合で抽出した方にお送りしています。
- ・被災程度による長期的影響を比較検討するため、震災による被害が軽かったり被害の無かった地域の方にもこのアンケートをお届けしておりますことをご理解のうえ、ぜひご回答いただきますようお願いいたします。
- ・アンケートについて不明な点などがありましたら、調査担当(兵庫県立こども病院周産期医療センター・大橋正伸)までお問い合わせください。

## ア ン ケ ー ト

あなたの場合に当てはまる答えの□には、|M|のように印をつけてください。( )の中には適当な数字・文字・文章を入れて下さい。念のため、母子健康手帳を参照しながら記入してください。

**A. 震災の被害についてお尋ねします。**

問1. 震災の時どちらにお住まいでしたか。

( )市( )区 または ( )郡( )町

問2. ご自宅の被害はどのようでしたか。

1 全壊(全焼) 2 半壊(半焼) 3 一部損壊 4 被害なし

**B. 震災のあった年(平成7年、1995年)にお生まれになったお子さんについてお尋ねします。**

問3. 何人目のお子さんでしたか。1 初めて 2 2人目 3 3人以上

問4. そのお子さんについて、下表に記入してください(双子の場合は2列、3つ子の場合は3列とも)。

	出 産 月 日	妊 娠 期 間	性 別	出 生 時 体 重	分 娩 方 法
1	( )月( )日	( )週	<input type="checkbox"/> 男 <input type="checkbox"/> 女	( )g	<input type="checkbox"/> 自然分娩 <input type="checkbox"/> 吸引または鉗子分娩 <input type="checkbox"/> 帝王切開
2	( )月( )日	( )週	<input type="checkbox"/> 男 <input type="checkbox"/> 女	( )g	<input type="checkbox"/> 自然分娩 <input type="checkbox"/> 吸引または鉗子分娩 <input type="checkbox"/> 帝王切開
3	( )月( )日	( )週	<input type="checkbox"/> 男 <input type="checkbox"/> 女	( )g	<input type="checkbox"/> 自然分娩 <input type="checkbox"/> 吸引または鉗子分娩 <input type="checkbox"/> 帝王切開

問5. 1歳6か月児検診のとき、お子さんの健康について医師や保健師から、とくに指導や注意を受けましたか。

1 はい：その内容( )

2 いいえ 3 1歳6か月児検診を受けなかった

問6. 3歳児検診のとき、お子さんの健康について医師や保健師から、とくに指導や注意を受けましたか。

1 はい：その内容( )

2 いいえ 3 3歳児検診を受けなかった

問7. 就学前(小学校入学前)検診のとき、お子さんの健康について医師や保健師から、とくに指導や注意を受けましたか。

1 はい：その内容( )

2 いいえ 3 就学前(小学校入学前)検診を受けなかった

問8. お子さんの発育や健康状態を、あなた自身はどのように感じておられますか。

1 よいと思う 2 普通だと思う 3 よくないと思う

4 お子さんの健康などについて、とくに気になることがあれば書いて下さい

( )

**C. 平成7年生まれ(上記)の次にお生まれになったお子さんについてお尋ねします。**

問9. 上記のご出産のあと何回妊娠・出産されましたか(現在妊娠中も含めて。なければ0と記入してください)。

1 ( )回妊娠した(現在妊娠中を含む) 2 うち( )回出産した

問10. 次のお子さんを出産された方にお尋ねします。次のお子さんについて下表にお答え下さい(出産された数だけ記入してください。記入欄の足りない場合は、余白に書き足してください)。

	出 産 年 月	妊 娠 期 間	性 別	出 生 時 体 重	分 娩 方 法
1	( )年( )月	( )週	<input type="checkbox"/> 男 <input type="checkbox"/> 女	( )g	<input type="checkbox"/> 自然分娩 <input type="checkbox"/> 吸引または鉗子分娩 <input type="checkbox"/> 帝王切開
2	( )年( )月	( )週	<input type="checkbox"/> 男 <input type="checkbox"/> 女	( )g	<input type="checkbox"/> 自然分娩 <input type="checkbox"/> 吸引または鉗子分娩 <input type="checkbox"/> 帝王切開
3	( )年( )月	( )週	<input type="checkbox"/> 男 <input type="checkbox"/> 女	( )g	<input type="checkbox"/> 自然分娩 <input type="checkbox"/> 吸引または鉗子分娩 <input type="checkbox"/> 帝王切開
4	( )年( )月	( )週	<input type="checkbox"/> 男 <input type="checkbox"/> 女	( )g	<input type="checkbox"/> 自然分娩 <input type="checkbox"/> 吸引または鉗子分娩 <input type="checkbox"/> 帝王切開

問11. 出産した病(医)院は妊娠した時から出産を予定していた病(医)院ですか。

1 はい 2 いいえ

問12. 次のお子さんの妊娠や出産の場合に、何かとくにお困りのことがありましたか。

- 1  はい：その内容( )  
 2  いいえ

問13. 次のお子さんの発育や健康状態を、あなた自身はどのように感じておられますか。

- 1  よいと思う 2  普通だと思う 3  よくないと思う  
 4 お子さんの健康などについて、とくに気になることがあれば書いて下さい  
 ( )

D. あなたご自身とご主人やご家庭のことについてお尋ねいたします。

問14. 現在、どちらにお住まいですか。

( )市( )区 または ( )郡( )町

問15. 震災後に、住居を変えられたことがありますか。

- 1  はい：その理由 a  震災のため転居 b  震災以外の理由で転居 c  震災とそれ以外の理由の両方  
 転居された経過を右下の例にならって下表に記入してください。記入欄の足りない場合は

一番下の余白に書き足してください。

- 2  いいえ

	時 期	住 居	例	時 期	住 居
1	震災前まで		1	震災前まで	自宅(一戸建)
2	平成 年 月から		2	平成7年1月から	避難所
3	平成 年 月から		3	平成8年4月から	仮設住宅
4	平成 年 月から		4	平成10年1月から	賃貸アパート
5	平成 年 月から		5	平成11年5月から	親戚の家(現在)
6	平成 年 月から				

問16. ご家族はあなたを含めて全部で何人ですか。( )人

問17. 震災前と比べて、あなたの健康の面で何かとくが変わったと思われることがありますか。

- 1  はい：その内容( )  
 2  いいえ

問18. 震災前と比べてあなたの就職状況(パートタイムを含む)に変化がありましたか。

- 1  震災前から就職していなかった 2  震災後も就職状況は変わらない 3  震災後に転職した  
 4  現在休業中 5  現在失業中 6  震災後に退職した 7  震災後新たに就職した  
 8  その他：( )

問19. ご自身の就業状況に変化のあった方に  
 お尋ねします。変化した原因を右の5つに  
 分けたらどんな割合になりますか。合計が  
 10割になるように〔記入された( )内  
 の数字を足したら10になるように〕お答え  
 ください。右の例を参考にしてください。

	震災の影響である	( )割	例1(4)割	例2(0)割
不況の影響である	( )割	(3)割	(2)割	
家庭の事情である	( )割	(0)割	(6)割	
出産・育児のため	( )割	(1)割	(2)割	
その他の原因	( )割	(2)割	(0)割	
合 計		10 割	10 割	10 割

問20. 震災前と比べて、ご主人の健康の面で何かとくが変わったと思われることがありますか。

- 1  はい：その内容( )  
 2  いいえ

問21. 震災前と比べて、ご主人の就業状況(パートタイムを含む)に変化がありましたか。

- 1  震災後も就職状況は変わらない 2  震災後に転職した 3  現在休業中 4  現在失業中  
 5  震災後に退職した 6  震災後新たに就職した  
 7  その他：( )

問22. ご主人の就業状況に変化のあった方にお尋ね  
 します。変化した原因を、右の4つに分けたら、  
 どんな割合になりますか。合計が10割になるよう  
 に〔記入された( )内の数字を足したら10に  
 なるように〕お答えください。

震災の影響である	( ) 割
不況の影響である	( ) 割
家庭の事情である	( ) 割
その他の原因	( ) 割
合 計	10 割

問23. お宅の暮らしむきを、震災の前と現在とで、お仕事や住居・経済状態など総合的に比べた場合いかがでし  
 ょうか。

- 1  非常に悪くなった 2  かなり悪くなった 3  少し悪くなった 4  ほとんど変わらない  
 5  震災前よりゆとりが出来た

問24. 震災の前より悪くなったとお答えの方にお尋ね  
 します。悪くなった原因を、右の4つに分けたら、  
 どんな割合になりますか。合計が10割になるよう  
 に〔記入された( )内の数字を足したら10になる  
 ように〕お答えください。

震災の影響である	( ) 割
不況の影響である	( ) 割
家庭の事情である	( ) 割
その他の原因	( ) 割
合 計	10 割

E. 震災を振り返って、どのようなお考えなどをお持ちでしょうか。

問25. 震災の年に生まれたお子さんに、震災のことを話されたことがありますか。

- 1  はい 2  いいえ

問26. 震災当時のことを夢に見たことがありますか。

- 1  はい a  1度だけ b  2、3度 c  たびたび  
 2  いいえ

問27. 被災したために、国・地方自治体・個人・その他から経済的援助を受けましたか。

- 1  はい ( ) から ( ) 円 ( ) から ( ) 円 ( ) から ( ) 円  
 2  いいえ

問28. 震災の年にお子さんを出産された日の直前直後(数時間～数日)に、とくにお困りになったことを次の中か  
 ら3つ以内で選んでください。なければ最後の14に「V」の印しをつけてください。

- 1  住居の崩壊 2  家族との連絡が取れなかった 3  年長の子供の世話が困難だった  
 4  食物の不足 5  飲料水の不足 6  入浴ができなかった 7  ガスが使えなかった  
 8  停電 9  現金の手持ちが少ない 10  電車・バスの不通 11  かかりつけの病院が利用できなかった  
 12  利用できる病院(医院)がわからなかった 13  その他( ) 14  なし

問29. 震災の前と比べて、非常事態に備えるためにしていることがあればお書きください。

( )

問30. 震災があなたやご家族に与えたもの(よいことも悪いことも)など、震災や災害一般についてお考えになっ  
 ていることを自由にお書きください。

問28と29についてのご回答を余白に書ききれないときは、おそれ入りますが任意の紙に書き足してください。

わずらわしいアンケートに再度お答えいただき、ほんとうにありがとうございました。同封しました

返信用封筒で11月10日までにご回答をお送りください。切手は不要でございます。

## 編 集 後 記

— 思い出はるかに —

阪神・淡路大震災の話をするごとに「早いもので」という言葉が口をついてでます。もはや阪神・淡路地区の住民に特有の挨拶になったのでしょうか。それとも普賢岳、奥尻島、有珠山など大災害に遭遇した人たちに共通する挨拶の前口上でしょうか。むかし祖母が大阪大空襲に遭遇した時のことを繰り返し話していたのを思い出しますが、人は未曾有の大災害に遭遇するとその強烈な体験は大脳皮質に硬く焼き付いてしまうのでしょうか。むろん全てのことを「早いもので」と片づけるわけではありません。半壊の自宅の修理のためにさらにローンを重ねた編集子の一人は過日ダブルローンの完済通知を見たときに「やっと」という言葉を思い浮かべました。しかし多くの人は震災の思い出をはるかなものにしたと願う潜在意識があり、「早いもので」という言葉を発することで地震後の苦勞をひと括りにして記憶の中から捨てようとするのですが、ふと今の暮らし向きを考えると「もし」の言葉が胸の奥底から湧き出てくるのを止めることができません。

歴史に「もし」はないという至言があります。「もし」家が全壊していなかったなら、「もし」家族が死んでいなかったなら、「もし」地震で失業していなかったなら、「もし」不況で会社が倒産していなかったなら、本書をお読みいただくときさまざまの「もし」を心の中にしまい込んだ妊産婦たちのがんばってきた姿が目には浮かびます。とくに震災後は大方の国民が経験したことのないタイプの長期間の不況にみまわれてきました。暗くて先のみえないトンネルを必死

に歩いてきたのが被災民の8年間であります。人は経験したことには比較的打たれ強い反面、未経験の事象にはまず不安感が優位に立つようです。それを反映してか、アンケートの回答者たちは地震のことについてはあっけらかんと回顧している一方で、その後の暮らし向きの変化など不況が大きく影を落としている問題の回答にはどこか暗い、おびえているような印象を持つのは小生だけでしょうか。

大震災から8年目を迎えて今回、地震が妊産婦のその後に与えた長期的影響につき再度調査したものの、調査前の予想よりも不況が被災の有無に関わらず兵庫県民に大きな影を落としていたことが明らかになりました。したがって震災の影響はその後の不況によって覆い隠された状況にあるといっても過言ではありません。再調査をすと言いついてしまった手前、地震が妊産婦に及ぼした長期的影響についてなんとか明解な答えをだそうと努めました。同僚医師からは先生いつまでやるの？と半ば呆れられ、ご指導いただいた村上宏先生からは私が押しつける作業で消耗された余命いくばくもなしと達観されたらしく、「また次回の調査も手伝わせるなら、地獄から神戸までのタクシー代金を前払いしろ」と決めつけられました。あせるわ、有意差はでないわ、8年前の調査は震災直後のため、当然ながら有意差が出やすい時期にあったので量的には膨大な肉体作業のみでまだ楽でしたが、今回の調査は精神衛生的に疲れたものになりました。

自然災害は人智をもってしても防ぐことはで

きず、大災害への基本的対応は被災民の再起支援にあるといっても過言ではないのですが、わが国では相も変わらず自然災害の予知に重点が置かれ、災害後の国民の立ち直りについては、「各自道を選べ」と八甲田山・冬の行軍的な考えがいまだにあるようです。はたして妊産婦が欧米諸国のように再起できる支援を受けることができたか断言できないところに本調査報告書のいらだちがあります。

かつて1923年におこった関東大震災により東京は江戸の面影がなくなったと言われるほどに壊滅的な打撃を受けました。しかし10年後の1933年に現在の平成天皇がお生まれになったときには当時の国情を反映してか祝賀の大提灯行列が東京中を練り歩いたと記録にあります。まもなく震災後10年目がやってきます。どのような「大提灯行列」を期待すればよいのでしょうか。たまたま今年は阪神タイガースが優勝しましたが、阪神・淡路大震災の被災民のみならず国民はそれ以上の「大提灯行列」を望んでいます。

本調査をもって阪神・淡路大震災が妊産婦に及ぼした一連の疫学的調査事業の終結といたしますが、本稿を終えるにあたって本調査が震災直後の調査と同様に財団法人日母おぎゃー献金基金の助成金でおこなわれましたことをここに記して感謝の意を表しますとともに、長期的調査の重要性につきご理解とご支援を賜りました日母おぎゃー献金基金・坂元正一理事長ならびに日本産婦人科医会・小国美穂兵庫県支部長に深謝申し上げます。また地震直後の調査から今回の調査に至るまで全てをご指導いただきました村上先生に衷心より感謝申し上げ、さらに、ご多用の中をお手伝いいただいた同僚医師や医局秘書のかたがたにもお礼を申し上げます。

本書は被災された妊産婦のことをいつまでも忘れない多くの人たちのお蔭で刊行することができたものです。震災の後遺症が一日でも早く「思い出はるか」なものになることを願いつつ、被災された妊産婦とご家族の皆さまのご多幸を心より祈念申し上げます。

大橋正伸

兵庫県立こども病院  
周産期医療センター

阪神・淡路大震災のストレスが妊産婦および胎児に及ぼした  
長期的影響に関する疫学的調査

調査主体

兵庫県産科婦人科学会  
日本産科婦人科医会 兵庫県支部

調査支援

財団法人 日母おぎゃー献金基金

アンケート発送・回収・集計作業協力

兵庫県立こども病院 原田 明、村田一男、石原尚徳、安田進太郎、芦谷尚子、陌間亮一、  
中田典子

調査担当

兵庫県立こども病院 周産期医療センター所長 大橋正伸  
元 神戸大学医学部教授 村上 宏



発行日 2003年 12月 10日  
刊行 兵庫県産科婦人科学会  
〒650-0017 神戸市中央区楠町7丁目5番1号  
神戸大学医学部産科婦人科学教室内  
☎(078)366-0554



阪神・淡路大震災のストレスが  
妊産婦および胎児に及ぼした  
長期的影響に関する疫学的調査

地震と闘ったお母さんたち、お元気ですか！

2003年12月

兵庫県産科婦人科学会